道求

第拾卷

第九號

明治四十五年二月十五日第三種郵便物認可
大正貳年十二月三十日發行（毎月一回廿日發行）

近角常觀編著書目

親鸞聖人の信仰
定價七十錢 郵税八錢 二版 クロース綴

冠頭 **歎異鈔**
定價五錢 郵税三冊迄二錢 六版 施本用小冊子

冠頭 **唯信鈔文意**
定價七錢 郵税二冊迄二錢 施本用小冊子

信仰之餘瀝要略
定價五錢 郵税四冊迄二錢 三版 施本用小冊子

施本用小冊子は部數に應じ充分割引す

當所は何書にても御都合により郵便集金法にて御注文に應じ可申候

申込所 東京市本郷區森川町一 振替東京一六六九六番 求道發行所

規定

一 本誌は毎月一回三十日發行とす
一 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
一 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
一 郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一 凡て送金受取人名宛は「東京本郷區森川町一番地求道發行所」とせらるべし
一 本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
一 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
一 本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	郵税一冊に付五厘

廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

大正二年十二月廿七日印刷
大正二年十二月三十日發行
發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
發行所 求道發行所 (振替口座東京一六六九六番)

大賣捌所 東京市神田區 東京堂 同 京橋區 北隆館 大阪市南區 德永趣西文庫

求道 第十卷 第九號

本願一實の大道

我等人生問題に於て、常に驚かさるゝことは從來自力律法の爲に拘束されて、進退谷まり、左支右吾、殆んど活路なき人が、忽に本願一實の大道に歸入するや否や、人生到る處逍遙として有無を解脱するのみならず、光明ある、眞實なる、永久なる立場を得ることてある、和讃に曰く、萬行諸善の小路より、本願一實の大道に、歸入しぬれば涅槃の、さとりはすなはちひらくなりと、實に唯一不二の大道てある。

本願一實の大道とか、本願圓頓一乘と云へば、單に本願を激賞誇張の言と考ふるにあらざれば、嘆美讃仰の形容の如く考へらるゝ傾がある、聖人が折角かく眞摯確實に絶對不二の大道を宣傳したまひし眞意を頂かねば、殘念てある、抑々人生に於て善惡の考を挾みて、諸の自力作善を以て解決せんとするが萬善諸行の小路てある、しかる處、結局善も果すあたはず、惡も避くるあたはず、何れの行も及びがたさが眞相てある、人生はそらごと、たはごと、まことあることなしてある、即煩惱具足、火宅無常、唯罪惡と虛僞を以て滿たされたる人生てある、否我身てある。

此に於て大に注意すべき事がある、此所に至れば、直に此の如き我等を救濟したまふが彌陀の本願てあると結論を急ぐのてある、而して救濟とは如何なる意義てあるか、隨て救濟されたる心持は如何なるものなるか、此等の實驗なくして結論を急ぐのは畢竟言語上の解決に過ぎないから、事實としては罪惡として見捨てられたも同樣てある、しからば救濟とは如何なることかといふに、罪惡のものを飽まて見捨てたまはぬ如來の大慈大悲をいたゞくのてある。

或は矜哀といひ、或は悲憫といひ、或は憐愍といふ、即ち罪惡なるものは見捨てられ、煩惱あるものは流轉するのが當然てある、しかるに如來大悲の矜哀は其見捨てらるべきものを見捨てたまはず、其流轉するを憐愍したまひて、大悲を注ぎて放ちたまはぬのてある、されど我等が罪惡は深重てある、煩惱は强盛てある、されど願力無窮にましませば其罪業の深重にあきれたまはず、其煩惱强盛のものに對して飽まて見捨てたまはぬ大悲が五刼永刼の御苦勞てある、煩惱具足の我等

は何れの行にても生死を離るゝことあるべからざるを憐みたまひて、願を起したまふ本意ひとへに惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人もとも往生の正因なり』また『煩惱を斷じなば即ち佛なり、佛のためには五刼思惟の願其詮なくやましまさん』と、如何に煩惱熾盛の我人もかくまでの大悲の親心をいたゞけば、眞心徹到して罪惡も無常も氣にかゝらず煩惱の氷解けて功德の水となり、圓融圓滿身心悅豫の境に入るのである、是即ち攝取不捨の利益にあづかるのである、是が即ち救濟である、本願一實の大道に歸入したる味である。

念佛成佛是眞宗、萬行諸善これ假門、權實眞假をわかずして、自然の淨土をえぞしらぬ、本願一實の大道の前には大小の聖人も重輕の惡人も同じく齊しく無限大悲の惠に浴するのである、我等が惡しければ惡しき事程悲憫したまふ親心である、遁るゝ事程放ちたまはぬ願意である、此の如き大悲大願に遇ひたてまつればとても遁るゝことは出來ぬのである、此の如き選擇願心は、遁る瀨なき親心を徹底せしめずば止まぬのである、本願力にあひぬれば、むなしくすくるひとぞなき、功德の寶海みち〳〵て、煩惱の濁水へだてなし、如何なる煩惱も罪業も如來の大悲には支へきれずして頭が下がるのである、惱みが融けるのである、名號不思議の海水は、逆謗の死骸もとゞまらず、衆惡の萬川歸しぬれば、功德のうしほに一味なり、盡十方無碍光の、大悲大願の海水に、煩惱の衆流歸しぬれば、智慧のうしほに一味なり、信樂開發の一念、不斷煩惱得涅槃の境が開け來るのである、信は願より生ずれば、念佛成佛自然なり、自然はすなはち報土なり、證大涅槃うたがはず、實に是れ自然の德である、眞如門の味である、此行は諸の善法を攝し、諸の德本を備ふ、極速圓滿す、眞如一實の功德寶海なり、故に大行と名く、華嚴經に無碍の一道といふも是である、涅槃經に一道淸淨とあるも是である。

聖人は此の如き救はれたる人生を嘆じて曰、大悲の願船に乘じて、光明の廣海に浮びぬれば、至德の風靜かに、衆禍の波轉ず、即ち無明の闇を破り、速に無量光明土に到り、大般涅槃を證し、普賢の德に遊ふ也と、實に我等は曾無一善のいたづらものである、されど萬德圓備の大善を與へらるゝのである、虛假不實の罪人である、されど淸淨眞實の御心を以て見捨てたまはぬのである、此に於て其淸淨眞實の御心に打勝たれ、自然に功德の利益を蒙るのである、九十五種世をけがす、唯佛一道きよくます、菩提に出到してのみぞ、火宅の利益は

自然なる、眞宗念佛きゝえつゝ、一念無疑なるをこそ、希有最勝人とほめ、正念をうとはさだめたれ、天神地祇も尊敬し、魔界外道も障碍することなし罪惡も業報も感ずるあたはず、實に不可思議なる人生を實現し來るのである。

されど我等は此に注意せねばならぬ、是は信の德である、法の利益である、如來の恩德である、光明の照耀である、月は磊々なる墳火岩の塊である、皚々たる氷雪の結晶である、日輪に照されて此の如く淸凉にして鮮明である、されど月其物は冷かなる一塊に過ぎぬことを忘れてはならぬ、炭團は中心まで黑き炭である、鐵は他まで冷かなる金屬である、されど之をして中心まで赤くし、炎々として熱せしむるは火の德である、我等煩惱闇黑の徒が如來火王の力によりて熾んに燒かるゝのである、されど我々自身は冷かなる石、黑き炭、寒き鐵たることを忘れてはならぬ、聖人悲歎述懷讃に曰く、淨土眞宗に歸すれども、眞實の心はありがたし、虛假不實のわが身にて、淸淨の心もさらになし。外儀のすがたはひとごとに、賢善精進現ぜしむ、貪瞋邪僞おほきゆへ、奸詐もゝはし身にみてり。惡性さらにやめがたし、こゝろは蛇蝎のごとくなり、修善も雜毒なるゆへに、虛假の行とぞなつけたる。無慚無愧のこの身にて、まことのこゝろはなけれども、彌陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまふ。小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもふまじ、如來の願船いまさずは、苦海をいかでかわたるべき。蛇蝎奸詐のこゝろにて、自力修善はかなふまじ、如來の廻向をたのまでは、無慚無愧にてはてぞせんと。嗚呼是れ聖人の悲歎也、述懷也、信卷に信德を述べ盡して曰く、誠に知ぬ、悲哉、愚禿鸞、愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快まず、耻づべし傷むべし矣と、而して歎異鈔第九章に、親鸞も此不審ありつるに唯圓坊おなじこゝろにてありけるの御敎化、全く同じく悲歎に對しての御述懷である。

近時求道者の人生問題につきあたりて窮迫を極め、又臨終病苦の極るとき、又一たび入信歡喜の後、其喜の失はれたるがため、又煩惱の熾盛なるがため、人生の暗黑に泣き前途の寂寞に心を傷ましむる人が多い、而して何れも歎異鈔九章唯圓坊に對する御敎化を以て、ます〳〵大悲の矜哀をいたゞくのである、他に對して不足を感ずるものは、不足を感じつゝ猶自己の不足を感ずるの非なるを憂へつゝあるのである、されど如來は我等の不足を感ずることの避くべからざるをみそなはし

て其不足を感ずるものを斥けざるのみならず、寧ろ之を悲憫して飽まで同情を以て惠みたまふのである、故に一たび此惠をきかば人生初めて中心の寂寞を慰するのみならず、他に對する不足の感を抱くの罪惡たるを懺悔して、而も其心ありながら猶氣にかゝらぬ氣樂の身となるのである、また、人あり、臨終病苦激しく、力衰へ口乾き念佛だに唱ふるあたはず、人皆念佛せよといふ、娑婆の緣つきて力なくして終るときに彼土へは參るべきなりの一言をきゝて涙潸然として下り、如何にも大悲の憐愍の深きに泣いた、又人あり嘗て如來廻向の意味をきゝて大歡喜を以て信仰を得た、されど年所を經るに從ひ喜べなくなつた、之が爲に苦悶を極め、殆んと其極に達す、されど是一念の慶喜を反覆せんとする空望である、此の如きは入信の昔を顧るがよい、喜びて而して入信したるものはない、寧ろ喜ばざる煩惱熾盛の我等を憐愍したまふ大悲の深き親心をきゝて入信歡喜したのである、されば後念におきても如來は猶喜ばざる我等を悲憫したまふこと、昔に變りはないのである、此大悲大願をいたゞくのである、近時此種の類例數へつくされぬ程である。

最後に繰返すことは入信の一念には、必らず想ひがけなき不可思議の感にうたるゝのである、何となれば、必ず心中に豫想することがある、たとへば無我になれたならばとか、此事が出來たなれば、喜べたなれば、死後が明らかになりたなれば等である、しかるに決して是が豫想通りになれぬのである、十人十色百人百色各々此豫想を形作りて其通りなさんとするが即ち萬行諸善である、しかるに決して豫想通りならぬのである、佛はかねてしろしめすといふは此出來ぬことをしろしめすのである、夫故に無我になれない、喜ばれない、我等の心をしろしめして悲憫したまふのである、我等が人生の無常に泣くも前途の黑暗を悲むも、佛かねてしろしめして矜哀憐愍のやる瀨なき御心を以て飽まで見捨てたまはぬが佛の御誓である、我等は此親心をいたゞくのである、此思召をいたゞくのである、是即選擇願心である、矜哀善巧である、是難度海を度したまふ大船である、無明の闇を破りたまふ慧日である、いづれの行も及びがたき闇である、してみようのなき溺れたる我等である、我等は明ならんと企てるのではない、自ら助からんとあせるのではない、寧ろあせりつゝある我等を矜哀し給ふが如來の本願他力眞宗である、無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、生死大海の船筏なり、罪障おもしとなげかざれ、是實に本願招喚の勅令である、眞如一實の大道である。

講話

『教行信證』信卷三信釋

（夏季求道會講話）

近角常觀

第十一席

欲生釋（二河の譬喩）

一

前席に於ては、欲生の如來廻向の趣きを話したのであります。既に再々申すが如く、阿彌陀佛の本願に、至心信樂欲生と、この三信が誓はせられてある。其の至心は、即ちまことであり、信樂は信じ樂ふこと、欲生は淨土に生れんと願ひ求むることである。即ち至心信樂欲生の三信は、我々がまことを以て佛を信樂し、淨土に生れんと願ひ求むる事であります。去りながら、其の三信が、我々自分の方よりまことを以て佛を信樂し、極樂に生れんならぬと、我々の方より力んで出來るかと言ふに出來ぬ。其處で之を何う頂くかといふに、私の方よりはまことになれぬが、其の者に佛の方よりまことを以て向うて下さるのである。私の方には、まことと言うては一分一厘無く、又佛を信ずる信樂の心も無ければ、淨土に參り度いといふ欲生の思ひも無い。けれども其の者を佛よりしてまことになし下され、其のまこと無き者に飽く迄まことにして下さる、佛のまことによりて、初めてまことならざる私の心に、有難いとまことの思ひが起るのである。して其の佛のまことはといふに、飽く迄私を信じ、遺る瀨無く此の者を哀れみて下る信樂の慈悲である。故に至心のまことは、信樂の慈悲である、となるのである。こは私の方には佛を有難いと仰ぐ信樂の思ひなどは毛頭無いに、其の者をば佛より飽く迄信じて下され、私の方よりは佛に向はぬに、佛より何處迄も其者を愛して下さる佛の信樂であります。又欲生も、もとより私の方から極樂に生れ度いなどの思ひは更に無い。けれども其の、佛に背き遁げ廻はれる私を、飽く迄佛の方より斯く廣大のまことを以て、信じ哀れみ見捨てず、何處迄も我が淨土に生れんと欲へと、遺る瀨無く向う樣より呼びかけて下さる呼び聲である。故に欲生は佛の方より私へ、彌々あなたの大悲を下さる處の如來廻向であると、之が至心信樂欲生の三信である。先日來此の事をお話したのであります。殊に前席來話す處の最後の欲生は、彌々私の手へお慈悲を手渡し仕て下さる處の、最も肝腎の處であります、そこで再々繰り反すなれども、以上を喩えて言うと、一杯の茶碗の水がありて、夫れが南無阿彌陀佛の水である。而して其の水は綺麗な透き通つた水である如く、其の南無阿彌陀佛は、飽く迄私が可哀想でたえられぬとある、清淨眞實の至心の御まことである。而して其の綺麗な透き通つた水は、即ちなみ〳〵と漂へ溢るゝ水である如く、其の至心の御まことは、何處迄も其の哀れ

なる者が捨てられぬとの信樂のお慈悲の心である。しかして其の溢ふるゝ水は、即ち此方に呑まさうが爲めの水である如く、其佛の信樂のお慈悲は、此のまこと無き私に、夫れを其儘廻向して、來れ〳〵と呼びかけて下さる欲生の呼聲であるとなるのである。即ち南無阿彌陀佛の六字は、何かと言ふに、佛が私を倦く迄哀はれみ思召すあなたの御まことの外に無い。して其の御まことは、何うしても其の奴が捨てられぬといふ信樂のお慈悲。其の慈悲は大悲の思ひ遣る瀬無く、あなたの方より呼びかけて下さる欲生の御親切である、となるのであります。

二

而して其の呼び聲によりて、私の方に廻向して下さるものに二つある。即ち往相廻向還相回向である。往相の廻向といふは、夫れ程廣大のお恵みで我々を遣る瀬無く思召し下さる、其の大悲のお心を頂くと、此の世の生命畢り次第我々を極樂淨土に往生させて下さる、之が往相の御廻向である。さりながら其の廣大の思召を頂いた上からは、唯極樂に參らせて下さる計りでは無い。極樂に參るといふは、唯極樂で樂んで居ることでは無い。眞に極樂に參らせて貰ひ、佛と成らして貰うと彌陀と同體、一體一味、親樣と同じ心にならせて頂くのである。さて其の眞實目の醒めたる淸らかなる境界に往き、振り反り三界を見ると、生々世々の父母兄弟が、猶ほ三界に迷うて居る有樣が、ぢつとして眺めて居られぬ。故に又此の度びは極樂より再び娑を現はし、一切有緣の人を、手引きし、此の人達に此の廣大なお慈悲を知らす爲めに、再び此の世に還つて來るとなるのである。之が還相の御廻向である。この働きをも信の一念に佛の方より下さるのであります。て以上を言ひ換へると、南無阿彌陀佛の廣大の御恵みより、まことに出來ぬ私の爲め倦く迄まことにして下され、私が信じ喜ぶ心無いのに、佛の方よりは何處迄も此者を見捨てず愛して下され、私がお慈悲に振り向かぬのを、佛の方より先手て呼びかけ、我が淨土に生れんと欲へと遣る瀬無く言ひかけて下さる。其の廣大のお恵みにより、我々が心に其の遣る瀬無きお慈悲の知れた一念には、夫れ程迄の廣大の思召しがる分るもの故、心に「有難う」と淨土に參らせて貰はうと欲する欲生の思ひが起る。故に其の上からは此の世に在る限りは、此のお慈悲一つて人生を通うらせて貰ひ、生命畢れば、設ひ命終の時勇ましく終はらぬも、必らず極樂に參らせて貰ひ、さとりの境界を開かせて貰ふ。既に悟りの境界に往かせて貰ふと、其の悟りの境界は、即ち大悲の親樣が一如法界の都より、法藏菩薩と名乘りを揚げ、我々を助けんが爲め此の土に顯はれ下されたる、其の阿彌陀佛の境界に到らせて貰うの故、此度びは我々にも其の一如法界の境界より、再び人生に濟度に出て來る力を得させて貰ふとなるのである。之れが還相廻向のお恵みなのである。て我々此の世に於て、不思議にお慈悲の有難きを頂かせて貰ひ、其の頂かせて貰ひたる道筋を考へるに、人生種々の人々により、種々なる悲喜の御緣を受け、ひと通りならぬお手引を蒙りたるを感ずるのである。斯く之等の人々が、或は父子兄弟となり夫婦朋友となり、自分がお慈悲に導かれる種々の御緣を作りて下されたるは、是れ皆な還相廻向の御恵みなる事を、信仰の上からは頂かれる次第であります。

三

さて斯く遣る瀬無きお慈悲を、今席は彌々頂く處を、善導大師の二河白道の譬喩により、お知らせ下されたのであります。先づ御文を讀ませて貰ふと、

光明寺和尙云、又回向發願生者、必須決定眞實心中回向、作得生想。此心深信由若金剛、不爲一切異見異學別解別行人等之所動亂破壞。唯是決定一心捉直進、不得聞彼人語。即有進退心生怯弱、回顧落道、即失往生之大益也。已上。

『光明寺の和尙』といふは、言ふ迄も無く善導大師であります。

『廻向發願して生ずる者は、必ず決定して眞實心中に廻向したまへるを須ゐて、得生の想を作せ。』

「廻向發願して」は、廻向は前席にて詳しく申すが如く、我々が自分の思ひを向うに廻らし向けるが本來の意味である。つまり我々が此方より自分の心を向けて、欲求する心であります。處が親鸞聖人は、我々が此方より願を發し、此方より思ひを向けて向うに求めるとなると、何うしても夫れでは我々は到れ無い。故に夫をば逆まにして、佛より哀はれと衆生の方に願を發し、廻向し與へて下さる事であると、お示し下されたのであります。で「廻向發願して生ずる者は、必ず決定して眞實心中に廻向したまへるを須ゐて、得生の想を作せ」——佛が眞實心中に於て、身口意の三業、身に修する所も、口、意に修する所も、これも衆生の爲め、あれも衆生の爲めてあると、廻向して下さる。其の廻向して下さる廣大なる佛の願を須ゐて、てある。須ゐてとは、醫師の藥を、こは自分の病氣を癒して下さる藥と、難有く服用するが須ゐるてある。即ち親樣が斯く衆生を助けてやらうと、向う樣より廻向發願して與へて下さる、其の廣大のお慈悲を有難く用ゐるのである。して向う樣から斯く迄にして私に與へて下さる廣大の思召しを須ゐて、得生の往生決定の想ひを作せとてあります。

『此の心深く信ずること、金剛の若くなるに由りて、一切の異見異學別解別行の人等の爲に、動亂破壞せられず』自分で廣大のお慈悲により、往生決定と思うて居る丈けの信心なら駄目であるが、此の心は今佛が遣る瀬無き御廻向の眞實を頂いて、佛のお慈悲で決定した往生一定の信心なれば、何のやうな事ありても、お慈悲の方が確か故、壞れるといふ事が無い。其の深く信ずる事、實に金剛の如くなるによりて「一切の異見異學別解別行の人等の爲めに動亂破壞せられず」てある。異見とは異なる考を抱いて居る人、異學は學問の立場の違つた人、其の他別解別行の、別の了解や、別の行法を持つて居る人、夫等の人達が來つて設へ如何やうに言はうとも、佛のお慈悲で頂いた信心なれば、此の信心が動かされ、亂され、破れ、壞はれるといふことは無い。之は一度び遣る瀬無き彌陀廻向のお慈悲に疑ひ晴れ、心よりあやまり果てゝ頂いた信心なれば、設ひ何人より何と言はれ、又人生の

如何なる出來事に遇はうと、決して動かさるゝ事無いとであります。之は御同やう、此の人生が暗くなればなる程、南無阿彌陀佛一つが、彌々明かに輝いて下さる事は、今度中村氏が御往生の際、死が近くと共に、彌々力强く喜ばるゝにて、明かに見せて頂きた事であります。殊に氏が最後迄病床に訪ねてお慈悲の事を話した私としては、又氏が生前其の席に列なるを最も樂みとせられた此の會合の皆さんとしては、氏が苦しき病苦の間に遣る瀬無き念佛のお慈悲一つて、安んじて往生を遂げられた事は、疑はうとしても疑へぬ事である。即ち廣大のお慈悲一つて、氏が極樂淨土に參られたことであります。之が唯我々が、自分の考て然う思ふてる丈けなら、單なる想像に過ぎ無いのである。さりながら事實明かに、同一念佛を喜ばせて貰うて居る我々としては、設へ氏の身は亡ぶも、氏が喜ばれた信心、氏が喜ばれた廣大なるお力一つは永久に生き長らへて、佛の淨土に往生し、安養界より今此の席を照覽して居て下さる事は、疑はうと仕ても疑へぬのである。すれば此の心深く信ずること、實に金剛の如くである。此の遣る瀬無きお力を共に知らされ、頂いて居る御同やうとしては、設ひ異學異見別解別行の人が何と言はうと、此の明かな事柄を動かすこと出來ぬのであります。

四

次は

『唯是れ決定して一心に捉つて、正直に進んて彼の人の語を聞くことを得ざれ。即ち進退の心有つて心に怯弱を生じ、回願すれば、道に落ちて、即ち往生の大益を失するなり。』

「唯是れ決定して」は、決定は今の向う樣からの仰せに、遂に此方の頭が下がりて、頂いた一念が、決定である。處が多くの人は、向う樣のお慈悲の方は聞かうとせず、自分の方から決定することばかりに力を入れるから、決定されぬのであります。之は例を以て言へば、前席に申した大草師が病中喜んて下された時、私が、「あなたと私は今生夢の中の交はりとして斯く長らく親しくさして頂きたが、何うかあなたもお慈悲を一つ頂いて下され。あなたが頂いて下さると私も其のお慈悲一つを喜ばせて貰うて居る事であれば、其の一念に、あなたも私も、『唯信鈔』にお示し下さる

今生夢の中の契をしるべとして、來世のさとりのまへの緣を結ばんとなり。我おくれなば人に導かれん、我先きだゝば人を導かん。生々に善友となりて佛道を修せしめ、世々に智識となりて、ともに迷執をたゝん。

である。故に何うかあなたも頂いて下され」と言う言下に、「あゝ有難い、君能く言うて呉れた。今迄何時決定の時が有るか〳〵と思うたに、あゝ分つたと言はれた一念が即ち決定である。「一心に捉つて」とは、一心は、即ち此の一念が一心なのであります。「正直に進んて彼の人の語を聞くことを得ざれ云々」——「其の遣る瀬無き仰せを頂いた上からは、正直に進んて他の者の彼れ是れ言ふのに耳傾けてはならぬ。其の時若し進退の心有つて、「斯うかあーか」といふ思ひを起し、怯弱の臆病な考を生じてあたりを顧慮すると、道を踏みはづして往生の大益を失するぞ」とであります。併しながら茲に言ふ可きは、茲て「夫れだから人の言に迷はされてはならぬ」と

なると、忽ち自力に陷入るのである。眞實の信仰の上からは、然うぢや無い。設ひ人が何と言はうと、迷はうと思ふても迷ふ事出來ぬ處が、眞實頂いた味ひである。故に親鸞聖人は『歎異鈔』の二章に於て、「親鸞は設ひ人が法然聖人の仰せを、うそである、欺かれて居るのであると言うとも、うそでも構はぬ、欺かれて居るのでもよい。——

たとひ法然聖人にすかされまゐらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。

とお示し下されたであります。て今之を中村氏の事に引き當てゝ御來聽を幸ひ、遺族の方の爲めに言ふならば、設ひ人が如來の敎法をうそである、迷信てあると言はうとも、既に自家の主人が、自分等の爲めに其の敎えを信し、其の法を遺して淨土に參られたのである上は、設ひ人が虛言と言はうと、其の法を信じて、設ひ欺されて其の爲めに地獄に墮ちても後悔せぬのである。何故ならば其の次の御示しには、

そのゆえは自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

設ひ虛言なら虛言でもよい。何故ならば、外の行法によりたら間違無く往生出來た身が、念佛を喜んだ爲めに地獄にも墮ちたのなら、すかされ欺されたといふ後悔もあるであらうが自分は最早や何れの行も及ばぬ、何れの道も盡き果てた、地獄へ行くより行き場の無い身の上である。然るに其の者を今哀はれみて捨てぬとの廣大の御聞かせに預りたのなれば、此右のにも左にも行けぬ者を、夫れが可哀相で捨てられぬと言つて下さるは、阿彌陀佛御一佛である。故に此の何れの道も絶え果てた者を、夫れをお見捨て下さらぬお慈悲一つが有難い、とより言ひやうが無いのである。處が茲が確かり頂けて無いと、「こんな事てよいのか知らん、之て墮ちんのか知ら」で、何時迄經ちても安心の時無いのである。然うては無く眞實お見捨て無きお慈悲が頂けた上からは、設ひだまされて地獄に墮ちたりとも、其の如き仕て見よう無き者を見捨てぬとある、遣る瀬無き仰せ一つの外無いのである。設ひ其の爲めに、だまされて地獄に墮ちたりとも、更に後悔すべからず候、なのであります。

猶ほ茲の處は取り違え易き處故、も一度申して置きますに、全體茲の御文は後ちに話す二河白道の譬喩より出て來る御示しなのである。而して其の二河の譬へは、何を御示し下されたかといふに。信心の上からは、設ひ人が何と言はうと、遣る瀬無き呼び聲一つを信じて、動かぬ信堅牢の味ひをお知らせ下されたのである。處が夫れを聞きぞこなつて、「夫れだから俺は人に迷はされてならぬ」と力まなくてはならぬのは、まだ本當に頂けたもので無い。眞實遣る瀬無き呼聲に打ち明かされた上からは、設ひ「虛言である」「僞はりぢや」と人から言はれやうとも、虛言ても僞りても、此の仰せを頂く外無いのである。何故ならば猶ほ外に助る道があるなら、外に仕やうも有らうなれども、今は何れの行も及はざる地獄一定の身の上である。然るに其の者を見捨てざる廣大の慈悲であるぞと、遣る瀬無き御親切に喰ひつかれて見れば、最早や之を頂

かざらんとするも、頂かざるを得ぬ、となるのであります。

五

次ぎになりて

眞知。二河譬喩中、言白道四五寸者、白道者、白之言對黑也。白者即是選擇攝取之白業、往相回向之淨業也。黑者即是無明煩惱之黑業、二乘人天之雜善也。道之言對路也。道者則是本願一實之直道、大般涅槃無上之大道也。路者則是二乘三乘萬善諸行之小路也。言四五寸者、喩衆生四大五陰也。言能生淸淨願心者、獲得金剛眞心也。本願力回向大信心海故不可破壞。喩之如金剛也。

之よりは聖人御私釋の御文であります。『二河の譬喩』といふは、言ふ迄もなく二河白道のお譬へのことである。二河白道の事は、皆さん御存知のことであるけれども、初めての方の爲めに簡單に話すに、先づ注意すべきは、從來之を聽き慣れて居る人は、譬喩の方に力を入れて、之が各自の心中の有樣なる事は知らぬでは無けれども、何うも其處が確かり頂けぬといふ憾みがある。又今迄佛敎をよく聞かぬ人は、西洋の宗敎に『天路歷程』などの內心の經驗を描いた書物のある事は知れども、佛敎の淨土門に斯の如き立派な尊き譬喩のある事を知らぬ人が多いのである。故に今手短かに申しますに、この善導大師が、我々が今の道る瀨無きお慈悲を頂き、信じた樣を此の譬喩で表はし下されたのであります。昨年の會には之を善導大師の本文で拜讀させて頂きた事である。今も分りよいやうに、善導大師の本文に就いてお話するに、

又一切の往生人等に白さく。今更に行者の爲めに一の譬喩を說いて信心を守護し。以て外邪異見の難を防がん。何者か是れや。譬えば人有つて西に向つて行かんと欲するに百千里あらん。忽然として中路に二河有り。一には是れ火の河南に在り。二には水の河北に在り。二河各濶さ百步、各深うして底無し。南北に邊り無し。正しく水火の中間に一の白道有り。濶さ四五寸許りなる可し。此の道東の岸より西の岸に至ること、亦長さ百步、其の水の波浪交はり過つて道を濕す。其の火焰亦來つて道を燒く。水火相交つて常にして休息すること無し。

つまり人ありて西に向うて行かうとするに、百千里の道程があつて忽然として、中間に二つの大河がある。一つは火の河、南に在り、一つは水の河北に在る。而して此の二河何れも廣さ百步、各深くして底無く、南北に向つて涯てが無いとである。而して其の水火二河の中間に正しく一つの白道があつて、其の道幅四五寸である。此の道、河の東の岸より西の岸に亘りて、同じく又長さ百步である。而して道の兩側なる水の河よりは、波浪交はり來りて頻りに其の道を濕し、火の河よりは、火焰來つて其の道を燒き、水火常に相交つて少時も休む間無いとであります。爾るに

此の人既に空曠の迥なる處に至るに、更に人物無し。多く

群賊惡獸のみ有つて、此の人の單獨なるを見て、競ひ來つて此の人を殺さんと欲す。死を怖れて直に足つて西に向うに、忽然として此の大河を見る。

處が茲に向うより一人の曠野をうろついて來る人あつて、其の人無人空曠の迥なる處にさ迷ひ出た、といふは人生一つとして助け無き有樣である。此間中より再々私自身の經驗を話し、我々自分は善いことが出來ると頼み、又人は當てになると頼みに思うてる間はよいが、彌々となると人生は、一つもたより無き味ひをお話した事であります。其の有樣は丁度曠野に唯一人さ迷うて居る有樣であつて、頼みとすべき人、物は更に無い。唯有るものは群賊惡獸のみあつて、此の人の唯一人なるを見て、殺さうと思うて競ひかゝつて來る。群賊惡獸といふは、我々の心中に在る淺間しき心を言はれたのである。我々の心中に、或は荒々しき怨み、怒り、腹立の思ひや、醜くき我慢、我見の思ひがあつて、夫れ等が群り起りて世に頼り無き自分を攻めつけるに譬へられたのであります。て其人驚き怖れて、遁げて西の方に走らうとするに、忽然として今の大河に突き當つた。そこで其人自ら思ふには、

即ち自ら念言すらく。此の河南北に邊畔を見ず、中間に一の白道を見る、極て是れ狹少なり。二岸去ること近しと雖、何に由つてか行く可き。今日定めて死せんこと疑はず。

「こんな大河がありては仕やうが無い、もう殺されるより仕方が無い」と、再び踵を廻らしてもと來た方に遁げやうとすれば、

正しく到り回らんと欲すれば、群賊惡獸漸々に來り逼む。正に南北に避け走らんと欲すれば、惡獸毒虫競ひ來つて我に向ふ。正しく西に向つて道を尋ねて去かんと欲すれば、復恐くは此の水火に墮せんことを。その時に惶怖すること復言ふ可らず。

即ち今の群賊惡獸が鋒を逆まにして逼り近づいて來る。之れてはならんと、今度は南北に脫れ奔らうとすると、又此の度びは惡獸毒虫が競ひ來つて我れに刃向つて來る。夫れかと言つて、又西に向つて道を辿つて行かうとすれば、今の水火の二河に墮せんこと疑ひ無い。此の時にあたりて、此の人最早や仕て見やう無く、惶怖すること言ふばかり無い、とであります。そこて今の南北に奔らうとすれば惡獸毒虫が競ひ刃向つて來るといふは、是れ我々の心中に、種々なる嫉み妬みの情などが我々を苦しむる事である。又群賊惡獸が鋒を逆にして我に逼つて來るといふは、先き言ふ種々なる荒々しき思ひの外、諸種の外界の誘惑が、眼耳鼻舌身より入り込んで、我々の心中を搔き亂す、つまり種々なる煩惱忘想が我々の心を惑亂する事である。之皆な我々の心中に在ることなのである。又水火の二河といふは、水河は我々の貪愛の心である。我々の心中に貪欲愛欲の風波がさか卷く事である。又火の河は、即ち我々の瞋恚の炎である。我々の心中が之等種々なる淺間しき心に四方より攻めたてられ、何とも仕て見やう無き苦惱の有樣であります。

六

さて斯く話すと、數年前福間久米吉氏が病中信仰に入られた樣を思ひ出すのであります。福間氏が癌に苦しまれた時病

中信仰に入り、書かれたものに『獲信の記』なるものがある。臥病十閲月、懊惱苦悶、心意の休慰何れに依るも要め得るものなし。身體進止の不自由は云ふ迄もなく、食餌の如きも漸く飲送して、僅に饑渇を充すに過ぎず。口舌は嘔して其の用をなさず、抑も余の病性たる、口腔内に發生せる難質の腫物にして、之が治術の初に當り、下顎骨の右方三分の一を切取して以て全癒を期したりしが不幸其の效を奏せず、切開又切開、遂に六回に及び、右頰下半部を全く切除し去るの苦痛を嘗む。眞に無告可憐の窮狀にあらずや。之に加るに片眼まさに明を失せんとし、且つ耳の下邊は炊衛を起し、其の苦痛の狀到底筆紙の盡すべきに非ず。此等の苦痛漸く減ぜんとすれば、又舌根の苦痛之に次で起り、其の狀恰も時々刻々余の身體を誅殺せんとする者の如し。……病苦が漸々加はつて來ると、苦しくて最早や何とも仕て見やうが無い。斯くなると日頃頼み置きつる妻子も財寶も、何の役にも立たぬ。身體の苦痛、精神の苦痛が一時に四方より群がり起つて我を苦しむる事は、實に時々刻々余の身體を誅殺せんとするものゝ如くである。

……これ余が現時の實狀にして、之を思ひ彼を考ふれば、現世生存の趣味何によりてか之を解せん。狂するが如く亂するが如く、この五尺の體軀を如何に處して可なるべきやを知らず。夢の如くにして夢に非ず、我にして我に非ず。進まんか進むに由なし、退かんか退くに處なし。斯くの如くにして余は實に煩悶苦鬪の極端に達し、人類の失心する正に此苦痛の一瞬時にあるを思はしむ。

實に福間氏の此の苦痛である。之が今の二河白道で、進退行き詰つたる苦みなのであります。

て今の二河の譬えて、其の旅人が群賊惡獸に追ひ立てられ、道げやうとしてはだと水火の大河に行き當つた。見ると其の間に一の白道がある。ある事はあるか、其道狹くして仕方が無い。さればとて後に戻らうとすると、今の群賊惡獸がやつて來る。それかとてぢつと仕て居れば、惡獸毒虫に刺されて仕舞ふ。のみならず前は火の河水の河である。是れ我々の進退行き詰つて、何とも仕て見やう無き處である。私など苦しんだ時は、人に自分より、善くすれば善いとは知れども、其の善くする事が出來ず、夫れかと言つて放つて置く譯にもゆかぬ。又皆さん人にしても、信仰を得度いが、其の信仰が得られぬ。得らぬからとて、得られる時節迄待てるかと言ふに待つてられぬ。何とも仕て見やうが無い處が、實に之れである。てもう何とも仕て見やうが無い。其人そこで遂に思ふには、

即ち自ら思念すらく、我今回らば亦死せん。住まるも亦死させん。去かば亦死せん。一種として死を免れずば、我れ寧ろ此の道を尋ねて、前に向うて而も去かん。既に此の道あり、必ず應に度す可し。

「もう何とも仕やうが無い。兎も角茲に水火の間に一條の道があるのである。之があるからは何とかならぬ事あるまい」と、其の道を渉る事に決心した。といふは「人生もう宗教の外は無い。兎に角此の道があるからは、之を求めるより仕やうが無い」となつた處である。と思ふと忽ち東岸より人あつてよんで言ふには、

此の念を作す時、東の岸に忽ち人の勸むる聲を聞く。仁者但決定して此の道を尋ねて行け。必ず死の難無けん。若し住まらば即ち死せん。

「其の道を行くと間違ひ無いから、わき見せずに眞直ぐに行け〳〵」と言つて下さる聲が聞える。夫れかと思ふと、又西岸上に人有つて喚んで言ふには、

又西岸上に人有て喚んで言はく汝一心正念にして直に來れ。我能く汝を獲らん。衆て水火の難に墮せん事を畏れざれ。

と呼びかけ下さる聲がある。とは言ふまでも無く東の岸の聲とは、釋尊初め諸の有緣の善智識の御敎化である。其善智識の御敎化の下に西の方に振り向くと、西の岸の上の呼聲とは、即ち阿彌陀佛の本願である。我々、お姿は拜めねども、西岸上に遣る瀨無き親樣がまし〳〵て、我々が、此の行き詰つた有樣を御覽下されて、呼びかけて下さるには、「汝、……」——汝とは其の仕て見やう無き私を指して直接汝と呼びかけて下されたのである。『愚禿鈔』のお言葉には、

西岸上に人有つて喚で言くとは、阿彌陀如來の誓願なり。

汝の言は行者なり、斯れ即ち必定の菩薩と名く。

汝の言を必定の菩薩と名くとは、即ち佛より我々の身の上を、汝と名指して呼びかけ下されたる、其の呼びかけられたる一念に、今は進退谷まつたる我々が、「あら有難や」と振り向ひた一念が信の一念である。其の一念に攝取不捨の御利益に預るのであるからであります。て「汝一心正念にして直に來れ」——一心正念とは、汝一心正念になつて、來いとの仰せでは無い。斯く最早や行き詰り仕て見やう無き我々に、佛よ。汝と呼び聲が聞えて下された一念には、何人も「やれ有難や」、と、其の呼び聲に振り向き頂かざるを得ぬ、其の一念が即ち一心正念である。「直に來れ」は、其呼び聲を聞くなり、言下に「有難や」と、即ち直にである。呼び聲を聞いてから、「此の惡い者が修行して行かんならぬのなら直ちにては無い。而して「……直に來れ、我能く汝を獲らん。衆て水火の難に墮せんことを畏れざれ」——「其の仕て見やう無き汝を助け度いばかりに現はれた我なれば、如何に水火の難が有らうが、如何に煩惱妄念が有らうが、決して間違はぬぞ」との遣る瀨無き招喚の呼び聲なのであります。

七

そこで先きの福間氏の『獲信之記』には、其の苦み極つた處に何うあるかと言ふに、直ぐ續いて

其刹那其瞬間、ふと「余は佛陀が吾人を助け玉ふと云ふを聞きしものにあらずや」との一念、余が心頭を刺感したり。

其は他無し。今春病臥以來、長子甲松が余の病苦の狀と精神の煩悶を見るに忍びず、一日寸時たりとも心意の慰安を得せしめんと思推せし爲めか、佛界の長老、村上、前田、菅瀨、近角の諸師に狂駕を請ひ、余に法敎を聽聞せしめしこと屢なりき。これ余が此の苦悶の瞬時、計らず佛陀の救濟を感想したる次第なり。而して此一瞬時の回想により、今の今迄堪え難かりし迷苦煩悶は頓に余の心頭より四散して、余は期ぜずして夢の如く、自然と口に南無阿彌陀佛の名號を誦唱したりき。噫。（下略）

其の苦痛の絶頂に達して、人生一切の物が當てにならぬ、自

分の妻子も何の甲斐も無いとなつた時、其刹那其の瞬間「佛は此者を助けると聞いて居たのては無いか」「佛は其の助からぬ最早仕て見やう無き者を、助けて下さる慈悲てあると聞いて居るては無いか」と、一念其處に氣がつくなり、不思議なる哉今迄仕て見やうが無い、最早や何等の助けも無いと思うて居る心中に、明に大悲のお見捨て無き廣大のお恵みが分り、今迄堪え難かりし迷苦煩悶は頓に四散して、余は覺えず夢の如く、南無阿彌陀佛と念佛したとあるのてある。茲は福間氏が、何うして其の時喜んだか自分にも分らぬも、今現在仕て見やう無き自分如きを見捨て給はぬ親の慈悲と聞いてるては無いか。と一念心に思ひ浮んだ時、我を忘れて南無阿彌陀佛々々々と、初めて念佛が自から口を衝いて、現はれたとてあります。

て今の二河白道に於ても、其人道る瀬無き西岸上の呼聲を聞くなり、

此の人、既にこゝに道はし、彼しこに喚ふを聞きて、即ち自ら身神を正當にして、決定して道を尋ねて、直ちに進んて疑怯退心を生ぜず。……

其の仰せの言下に安心して、道を尋ねて往くと、決定が出來たのてある。して

……或は行くこと一分二分するに、東の岸の群賊等喚つて言く、仁者回り來れ、此の道嶮惡なり、過ぐることを得ず、必ず死せんこと疑はず。我等衆べて惡心ありて相向ふこと無し。

一歩二歩行きかけると、先きの種々なる群賊惡獸等が、「そんな道行くと危いから歸れ〳〵」と呼び戻す、といふは我々の心内に動もすると、つまらぬ世間の思想等に動かされ、疑惧の念を生じ來る事てある。けれども

此の人喚ばふ聲を聞くと雖、亦回顧みず。

道る瀬無き呼び聲を耳にしたからには、何程、あとより呼びかけられても、最早や振り向か無い。

一心に直に進んで道を念じて行けば、須臾に即ち西の岸に到つて、永く諸難を離れ、善友相ひ見て慶樂すること已むこと無らんが如し。此は是れ喩へなり。

一途にお見捨て無き仰せを喜んて行くと、須臾にして大悲の膝許に參り、諸の善友に遇ひて、慶樂極り無い、とてあります。

八

さて之よりは合法の文になりて、之も讀ませて貰ふと、

次に喩を合せば、東の岸と言ふは、即ち此の娑婆の火宅に喩るなり、群賊惡獸詐はり親むと言ふは、即ち衆生の六根六識六塵五陰四大に喩ふる也。無人空迥の澤と言ふは、即ち常に惡友に隨つて、眞の善知識に値はざるに喩るなり。……無人空迥の果てしも無き曠野にさ迷うて更に人物も無いとは、我々が生死の人生に漂うて、日夜善し惡しの問題已外、未だ眞の知識に出會はぬに喩えるとの仰せてある。

……水火の二河と言ふは、即ち衆生の貪愛は水の如し、瞋憎は火の如しと喩ふるなり。中間の白道四五寸と言ふは、即ち衆生の貪瞋煩惱の中に、能く清淨願往生の心を生ぜしむるに喩るなり。乃し貪瞋强きに由るが故に即ち水火の

如しと喩ふ。善心微なるが故に白道の如しと喩るなり。又水波常に道を濕すとは、即ち愛心常に起つて、能く善心を染汙するに喩るなり。又火焔常に道を燒くとは、即ち瞋嫌の心、能く功德の法財を燒くに喩るなり。……

水火の中間に一の白道があるとは、衆生の貪瞋煩惱の胸の中に、有り難や一人の親が此のものを捨てぬと廣大のお心て向はせられてある。其の親の道る瀬無き呼聲がひと度び耳に入る時は、如何にもお見捨て無きお慈悲の有難いと、廣大の淸淨願往生心の生ずるに喩へるとの御文てある。而して其の親のお慈悲をひと度び聞いた心は火にも燒けず水にも溺れぬ、遂に親の膝許に行きつく迄彌々明にかゞやいて下さる白道てあるが、初めから明かになりづめては無い。時には貪愛の水波に蔽はるゝこともあれば、瞋憎の火焔に燒かるゝ事もある。斯く貪瞋煩惱の少時もやまぬ私の胸中故、甚だ幽かなれども其の下から常にをも變り無く續いて下さる信心の白道故、即四五寸の細き白道とあるのてある。續いて

……人、道上を行きて西に向ふと言ふは、諸の行業を回して直に西方に向ふるに喩ふる也。東の岸に人の聲あつて勸め道はすを聞いて、直ちに西に進むと言ふは、即ち釋迦已に滅したまひて、後ちの人見たてまつらざれども、由ほ教法有つて尋ぬ可きに喩ふ。即ち之を聲の如しと喩るなり。或は行くこと一分二分するに、群賊喚び回すと言ふは、即ち別解別行惡見の人等、妄りに見解を說て、迭に相ひ惑亂し、及び自ら罪を造つて退失するに喩るなり。西の岸の上に人有つて喚ふと言ふは、即ち彌陀の願意に喩るなり。須臾に西岸に到つて、善友相見て喜ぶと言ふは、即ち衆生久しく生死に沈んて曠劫より輪廻し迷倒して、自ら纏うて解脫するに由無し。仰て釋迦發遣して指へて西方に向へたまふことを蒙り、又彌陀の悲心招喚したまふに籍つて今二尊の意に信順して、水火の二河を顧みず、念々に道るゝこと無く、彼の願力の道に乘じて、捨命已後彼の國に生ずることを得て、佛と相見て慶喜すること何ぞ極らんに喩るなり。（已上）

實に斯の如くあるが、善導大師の二河白道の譬てある。こは皆さん御存知の處であります。

猶ほ序に、以上を繪に顯はした、二河白道の繪なるものがあつて、こは何處にても有る故、皆さん御存知の事てあるが、石見の益田町には弘法大師の筆と稱するのが有つて。夫れには水火の河の中からも、一面に蓮華がはえてある。先年拜ませて貰つて、殊に有難く感じた事てあります。

九

さて以上の二河白道の譬喩が、今席の處には出て來たのてあります。即ち

『眞に知ぬ。二河の譬喩の中に、白道四五寸と言ふは、白道は、白の言は黑に對するなり。』

善導大師が二河の譬喩の中に、最も肝心の信心の一道を白道四五寸とお示しあらせられた、今其の思召を頂くに、全體白の言は黑に對するお言葉てある。其の白とは何かと言ふに、

『白は即ち是れ選擇攝取の白業、往相回向の淨業なり』

阿彌陀佛が有らゆる往生の行業の中より、之れなら如何なる愚痴無智の者も稱へて往生する事が、出來ると、選擇攝取し

て下された處の、南無阿彌陀佛の六字の淨業が白である。即ち之なら如何なる者も頂いて極樂に往くことが出來ると、選らびに擇んで與へて下された處の往相廻向の六字名號の事である。又其の反對の黑とは何うかといふに、

『黑とは即ち是れ無明煩惱の黑業、二乘人天の雜善なり』

黑とは我々の心中の無明闇黑の煩惱の事である。即ち常に人に善くするとかせぬとか苦しんで居る二乘や人天の毒雜りの善のことである。又

『道の言は路に對するなり。道とは則ち是れ本願一實の直道大般涅槃の大道なり。路とは則ち是れ二乘三乘萬善諸行の小路なり。』

白路と言はずして白道と示されたは、此の道は二乘や三乘のするとかせぬとか言つて居る小さき、廻はり遠き萬善諸行の小路とは全然別である。佛の大善大功德を廻施して下さる本願一實の直道、大般涅槃の大道であるが故に、即ち道である。

『四五寸と言ふは、衆生の四大五陰に喩るなり。』

而して其の大道は何處に在るかと言ふに、廣き野原に在るのては無い、頂いた我々の體内に在る。四大五陰は我々の體を形造る諸の分子である。其の四大五陰より成立つて居る我々の肉體、其の小さき體内に、「有難い」と眞に頂いた信心が白道である。故に廣大なる白道なれども、我々の四大五陰の小さき體内に頂く白道故、四五寸であります。次に

『能生淸淨願心と言ふは、金剛の眞心を獲得するなり。本願力回向の大信心海なるが故に、破壞す可らず。之を金剛の如しと喩ふる也。』

即ち今の、善導大師が合法の文に於て、「中間の白道四五寸と言ふは、衆生の貪瞋煩惱の中に、能く淸淨願往生心を生ずるに喩ふと仰せられた其能生淸淨願往生心とは遣る瀨無き呼聲の下に、金剛堅固の佛の直實心を頂く事を言はれたのである。此の我々貪瞋煩惱中に、佛のお見捨て無きおまことを頂いた此の眞實心は、是れ即ち私の心で無い、佛より御廻向の、廣大なる大信海である。故に如何に水火に犯されやうが、如何に煩惱妄念が起らうが、其の爲めに破れ壞はれるといふ事は無い。故に金剛の寶珠に喩へるとのお知せであります。

一〇

次には

觀經義、云、道俗時衆等、各發無上心、生死甚難、厭、佛法復難、忻共發金剛志、横超斷四流。正受金剛心、相應一念後果得涅槃者。抄要 又云、眞心徹到厭苦娑婆、忻樂無爲、永歸常樂。但無爲之境不可輕爾即階、苦惱娑婆無由輙然得離。自非發金剛之志、永絶生死之元。若不親從慈尊、何能免斯長歎。又云、言金剛者、即是無漏之體也。已上。

『觀經義』は善導大師の『觀經』の註釋である。上の二河の譬喩を初め、先き程の御文も、皆な此の註釋の御文から出て來るのであります。

『道俗時衆等各無上心を發せども、生死甚だ厭ひ難く、佛法復忻び難し』

道俗時衆は僧も俗も總ての者がである。總ての者が無上心、——無上心は即ち上求菩提下化衆生の無上菩提心のことである。即ち此の世を捨て、淨土に往かんならんと力む發菩提心である。其の菩提心を發せども、生死甚だ厭ひ難く、佛法また甚だ忻びにくい。

『共に金剛の志を發して、横に四流を超斷せよ。』

金剛の志は、即ち其處で佛が廣大の慈悲を以て、其の厭離穢土忻求淨土の心の無き者を哀はれみ下さる、其の造る瀨無きお心を聞かせて貰つて、其の一念に共に金剛の信を發起し、横に四流を超斷せよである。横は、即ち我々が、佛のお見捨て無きお心を聞かせて貰つて、迷ひの根切れをさせて頂くは、一つ宛順々に善くなりて生死の迷ひを絶たして貰ふので無い。一つ宛順々に悟つてゆくは、竪の法にて、即ち自力の道である。處が他力は信の一念に、一遍に生死を絶たせて頂くのであるから、即ち横である。超斷は、今の漸々にゆくのなら超斷て無いが、處が他力は、我々が人生に於ける五分々々を、横合ひより佛のお慈悲に引つ取られ、今迄の五分々々が一遍に無くなるのであるから、横に四流を超斷するのである。四流とは、四暴流と言つて、欲暴、有暴、見暴、無明暴と此の四つを言ふ。要するに三界の迷ひの事を言ふのであります。而して

『正しく金剛心を受け、一念に相應して後果涅槃を得ん者と言へり。』

斯くして五分々々の無くなつた者は、正しく金剛の信心を受け、お見捨て無き廣大のお慈悲に一念に有難やと相應して、涅槃の妙果を得るとであります。

一一

次には

『又云はく。眞心徹到して苦の娑婆を厭ひ、樂の無爲を欣んで永く常樂に歸す可し。』

こは非常に有難き御文であります。眞心徹到は我々が此の世て五分々々で惱み苦しんで居る。其の私の五分々々を、飽く迄哀はれみお見捨無き廣大のおまことが、眞に私の胸中に徹到して、其の廣大の御親切に頭の下つた一念が眞心徹到てある。昨年拜讀した處の善導大師の御文には、

又云はく。敬て一切往生の智識等に白さく、大に須く慚愧すべし。釋迦如來は實に是れ慈悲の父母なり。種々の方便を以て、我等が無上の信心を發起せしめたまへり。

此のお言葉を『和讃』にお示し下されては

釋迦彌陀は慈悲の父母、　種々に善巧方便し
われらが無上の信心を、　發起せしめたまひけり。

とある。即ち我々にお見捨て無きお慈悲一つを知らせん爲めに釋迦彌陀二尊が、慈父母となりて種々に善巧方便を仕て下されたといふ御示しである。而して其の次ぎの『和讃』に今の御言葉が仰せられてある。

眞心徹到するひとは、　金剛心なりければ、
三品の懺悔するひとは、　ひとしと宗師はのべたまふ。

即ち眞にお慈悲の届いて下された一念が、眞心徹到てありま

す。而して一度其のお慈悲が屆いて下さると、我々自分て苦の娑婆を厭ふの、樂の無爲を欣ぶのと、そんな心の生ずる我々ては無けれども、其の廣大のお慈悲に知らされて、此のお慈悲ならてはと、世の中を厭ひ、極樂を願ふ心を生じ、永く常樂に歸せさせて頂く事が出來るのてある。

『但し無爲の境は、輕爾として即ち階ふ可らず。苦惱の娑婆は輙然として離るゝことを得るに由無し』

去りながら、此の極樂無爲の境界は、我々自分としては輕ろ〳〵しく容易に昇れる階段ぢや無く、苦惱の娑婆は手易き事て捨てらるゝ我々ぢや無い。

『金剛の志を發するに非ずよりんば、永く生死の元を絶たんや。』

然るに、斯く我々、此の度び生死の元を絶ち、涅槃のさとりに行く事の出來るものは、全く自力て叶ふ事ぢや無い。大悲のお手許より遣る瀬無き誓願の繩を下して、此の者を引上げて下さる廣大なる佛智の不思議により

彌陀の誓願不思議に助けられ參らせて往生をとぐるなりと信じて、念佛まうさんと思ひ立つ心のおこるとき、攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

其の一念に開發させて下さる金剛信の働きによるのてある。

『若し親しく慈尊に從ひたてまつらずば、何ぞ能く斯の長歎を免れん。』

若し不幸、彌陀釋迦の二尊の慈父母に値ひ奉ずは、何ぞ苦海沈淪の永刼の歎きを免れようぞ、と。何うも善導大師には斯くの如き敬虔なる啓白のお言葉が多いのてあります。『和讃』の御教化には又茲を

弘誓のちからをかふらずば、
佛恩ふかくおもひつゝ、
娑婆永刼の苦をすてゝ、
本師釋迦のちからなり、

いづれのときにか娑婆をいてん
つねに彌陀を念ずべし。
淨土無爲を期すること、
長時に慈恩を報ずべし。

又次には

『又云はく、金剛と言ふは、即ち是れ無漏の體也』

我々の心中に有難やと頂く一念の信心は、我々の四大五陰の穢き體中に頂く信心なるも、其の心は是れ無漏の佛心てある。佛のお心が我々の心中に宿りて下されたものてある。この故に如何なる事あらうと、此の心は我々の貪瞋煩惱の爲めに犯され穢さるゝ事無い。故に即ち金剛である。而して之からが三信釋の結末の有名なる御文になるのてありますが、夫れは彌々最終の講席として次席に申述ぶる事と致します、（夏季求道會第七日第一席）

最後の一點

人往々我は多年信仰をきゝて大凡は了解されたれどたゞ最後の一點、御慈悲を頂くところ丈がはつきりせぬといふ。されど其だ謂れなきことなり。いかに應現の筆に酷似したる給なればとて一點たりともあやしき處あらば全部僞筆と定まるがごとく、信仰もいかにふく理解したればとて、眞實御慈悲に腹ふくるゝに非ずは何の益にもたゝず、故に信仰の評價は零點か百點かの外なし。

告白

踴躍歡喜

堤　友次郎

福岡の吉田先生から私に告白をせよとのことてありました。私如きものが告白などとは恥かしきことゝ思ひ、遠慮いたして居ましたところ、近角先生よりの仰せもあるから、是非に書けよと重ねての仰せを蒙り、實に勿體なく思ひました。私は智慧もなく學問もなく、唯ありのまゝを書かせて頂くのてあります。

私の生れは福岡縣浮羽郡田主丸町て御座います。私の家は眞宗の門徒て父も母も至りて信心厚く、常に御寺に參詣いたすのてあります。斯樣な家庭てありますから、幼少の時分から御佛前に參れ〳〵とすゝめられて居りました。どう云ふものか私はなか〳〵參りません。そこて御前が參れば佛樣が菓子を下さると申しますから、私は御菓子の欲しさに老母にひかれて、やつと御參りする樣なことてした。父が私の十五六の折に御つとめの稽古をせよとて、一ヶ月餘りも御寺へ伴れて行つたこともあります。今から思へば當時佛樣は、如何にやるせなく思召たてあらう。私が十七八の頃田主丸に佛教青年會が組織されました。毎月出席はいたしますが、一向有難ことはわかりません。唯父に對する申譯てあります。私は至りて短氣の性質て、父が私に申聞かせてもいたすと、却て父を恨む樣な有樣にて、その時の胸の苦しさは何とも申樣がありません。私が二十一歳の時に事業上の失敗から、熊本縣球摩郡人吉に移住せねばならぬことになりました。私もこの際非常に自分の決心を固め、父を助けて是非共家を起さねばならぬと思ひました。その年三月人吉に家をかまへました。父は第一番に御寺に參りました。その御寺と申すは當時大谷派の説教所てありまして、後父が世話にて今は林照寺と云ふ自們寺になつて居ります。引越した當年に、弟妹二人死去いたしました。事業も思はしくなし、父のなげき、心配は一通りてありません。私は身を碎きても成功をせねばならんと云ふ考がいよ〳〵強くなりまして、一意專心家業に働きました。それが爲め佛樣の方は一寸も願みることなく、暇がない〳〵と云ふことが口癖てありました。現今の居宅は父が御寺に參り、その歸り途に御寺の前に立寄り、その人の世話にて買求めました。一考て見ますれば家を求むるにしても、皆佛法の御緣より來て居ると思ひます。父も母も御寺に參ることは毎月の樣てあります。又毎朝毎夜御内佛への御禮は、まことに叮嚀てありました。私は一度も參りませんから、常に參れよ〳〵と申ます。私は例の如く暇がないから參りませんと申ます。父母が申しますには、「金はいくら蓄めても死ぬる時は持ては行かぬ、人間は御信心なくては何の所詮もない」と。其度に私は之丈け心配して働くのに、たとへ親てもあまりひどい云ひ方てあると、腹を立てるのてあります。時としては一週間位腹を立てゝ、兩親にものを言はぬことさへあります。私自分の考て

は人に親切もつくし憐みもなし、充分人間のなすべきことはなして居るから、悪い所へは行かぬ、だから御寺に參らんてもよいと言はん計りに思ふてをりました。實に御はづかしいとも、何とも申樣が御座いません。弟は私とは違ひよく御寺に參りますから、父母も氣に入て居る樣て、私に對しては弟程にかはいがらぬ樣に思はれて、兩親を恨むことも度々でありました。時としては親に向け打擲でもしたい樣な、おそろしき根性を起すことさへありました。

父は明治四十二年九月に死去いたしました。死にます一週間前、私に對して後をついでくれ、さうして佛樣を大切にせよと申しました。父が佛樣をよろこ ぶ事は唯ならぬ事てありました。私はその時はしみ〳〵胸にこたへましたが、やはり仕事の方に計り心を向けまして、御佛前に參ることは暇がない〳〵と一點張。しかし父親が後をついでくれと申しました一言は、どうしても頭からはなれませんから、朝一度丈はほんの一寸てはあるが、手を合はせるのてあります。その私の心持は、「あとはきつとつぎます、今ては暇がないからしばらく待て下さい。」と佛樣に申上るので御座います。今から思へばそれが宿緣てありました。　御寺の御院家樣は、いつも私に御父樣の後はついでもらはねばならぬと申されまして、御客僧の見ゆる度毎に、私へ停車場への御迎には出てくれよと申されますから、心せわしくも其都度參るのてあります。その代り御寺迄送り屆けますと、御說敎も何も聞かず、急いで宅に歸るので御座います。近角先生が四五年前御出の時も、御迎には行きながら御顏さへも存じあげぬ樣な私てありました。

私の兄弟は今存命して居るのが男二人女四人て、私が長男てあります。一番末の妹が勉强の爲福岡に行て居りましたが、歸つて申しますには、「福岡には吉田先生と申して大變ありがたい方が御座る。その御方の御導きにて、私ははじめて、御慈悲の廣大なることを頂かせてもらひました」と申して、大變よろこびます。私はそうかい位のことにて餘り氣にもとめませんでした。私の弟は當地より六里ある多良木と申す所に分家をしてをりますが、その弟が當時信仰のことについて非常に煩悶して居たとのこと。私には何の事やらわかりませんが、この末の妹が直樣多良木に參り、吉田先生のことを申したそうて、弟は直に福岡迄參り、彼是十日餘りもいたし歸て參りまして、大變によろこびます。行きがけの顏付と戻りの顏付はまるて變てをります。その次には母も參り、姉も參り、中の妹も參り、何れも〳〵歸つてくると大變によろこびます。そして皆一樣に吉田先生〳〵と申します。多良木の弟が時々やつて來ます。來さへすれば母やら姉やら皆一所になつてうれしさうに御話をいたしてをります。私には何のことやら少しもわかりません。唯福岡の吉田先生とやらはヨッポドありがたい方であらうと思つて居りました。

其内に私の妻が病にかゝり熊本病院へ入院することにきめて居りましたところが、弟が來りて申ますに、折角入院せしむるなら熊本よりも福岡の方が良い。福岡病院には吉田先生も御いでになる、御法話も頂かれるから、是非福岡にせよとすゝめます。私もなるほどゝ思ひ贊成をいたしまして、早速

私が妻をつれて出福いたしました。妻と共に吉田先生の御宅に伺ひました。私の目に吉田先生の御狀態は唯ならぬ御方だと見えまして、どうやらなつかしく思ひました。先生は私に對し『堤さん御信心の方はどうてあります』と御尋になりました。私は有がたくも何ともありませんと御答申しました。先生が「さうてありましよう」と申されました。其夜は宿に歸り、翌朝は病院に於て御目にかゝり、妻のことども托してすぐに歸ることにきめました。私も後生が大事と思ふなら、滯在して御話を承はるのてありましようが、私には後生のことより家業の方が大切に思はれまして、どうしても逗留する氣になれません。丁度その際私の妹聖は信心がわからぬとて態々出福して、吉田先生の御宅に滯在してをりました。私はどうかいとたづねました。義弟は「この度は頂かねば人吉には歸らぬ」と申ます。私は唯熱心な事だと感心しました。今思ふて見ますればこちらから熱心するのはあべこべてあります。私も何とやら物足らぬ思ひしつゝ歸りました。妻もやがて御信心にもとづいたさうで、本人よりもなが〳〵とよろこびの手紙をよこしました。私にはその意味が少しもわかりませぬ。

其の後一番に御緣にあづかつた末の妹が話しますに、吉田先生からこの暑中休暇には人吉に遊びに來ると手紙が參りましたが、如何いたしましようと申しますから、私も心から希望いたしまして「御出下され」と返事を出せと申しました。吉田先生よりは休暇日取の都合上、七月にしようか、九月にしようかとの申越しがありましたから、それは七月がよい早いがよいと妹に申送らせました。いよ〳〵七月二十一日御いてることにきまりました。私がその日をまつことは非常なもので、今考へて見れば斯樣なことが一々不思議てあります。私の宅には父存命中御本山の御法主樣が御下向になつたことがあります。この度吉田先生の御出もその通りに思ふて待ちました。茲に一寸申上ますが、私は斯樣に吉田先生を待ちはしましたが、御信心を頂かねばならぬなどの考は少しもありません。唯待つて待つて待ちました。不思議てあります。二十一日六時頃いよ〳〵御出になりました。其夜は御慈悲の御話を頂きました。私の考を先生に御尋いたしました。「私は病氣をして醫者に賴むならば、醫學博士を信ずるより外はない。御信心を頂かうと思ふならば、本願の仰せの通りを頂くより外はありません」と思ひます、如何てありますか」と。先生は御よろこびなされて「さうてあります、その通りてあります」と申されました。二十二日の日は私も大變聞く氣になりまして、先生の御傍を離るゝことが出來ません。先生は人生の有樣を御話になりました。私が考へますに、體は吉田先生なれども御話は本願の御話てあると思ふて聞て居りました。今考えて見ますれば御文樣に、「わき目をふらず一すぢに仰せの通りを頂けよと」書てありますが、私はその通りに頂て居りました。實に不思議てありました。先生の御話には耳四郎の御話も頂き、姨捨山の話も頂き、きず娘の御話も頂き、本願の御やるせないこと一通りの事てはない。私は何とも申樣のない樣になりました。けれども一向にしみ〳〵となりませぬ。ところがすぐの妹が先生に向ひ、「昨夜は先生に御目にかゝりて斯樣〳〵な夢を見ました」と御話しいたしますと、先生は非常に

不思議に思はれた御樣子にて、涙をながし妹に向ひ、本願のやるせないことを懇々と申されます。不思議にも其の御話の一言一句が私一人に向はせられて仰せらるゝ樣に思ひました。私は何とも申樣がありませぬ。そこで私がたまらなくなつて涙をながし、かういふ有がたい事がなぜ御前にはわからんかと妹に申しました。其夜はそのまゝ床につきました。

翌二十四日朝五時頃ふと目を醒ましますと、本願のやるせないこと胸一ぱいになり、自分の是迄父に對しての不幸、母に對しての不幸のおそろしき事、續々と思ひ出され、その下から又本願の私に向はせられてのやるせない事を思はれ、他力の信心は、他力の信心はと思へば涙がこぼれ、父の事を思へば、父がながい間自分に對し佛樣のやるせない事を申して居たのを、無駄にしたことを、おそろしき事と思ひ、父を思ひ、母を思ひ、本願のやるせないことを思ふ毎に涙ながるゝ計り、そのまゝ起き出て面を洗ひ、始めて御佛前に自ら御光をあげ、如來樣の御顏を見るなり頭あがらず、有難いやら勿體ないやらうれしいやら、何ともかとも申樣はありませぬ。念佛してはよろこび念佛してはよろこび、涙をながす計りなり。漸くにして御佛前を離れ椽側にきますと、又もわが身の罪のおそろしきこと、本願のやるせないことが胸一ぱいになり、涙がせきあげてきます。しばらく一人て泣て居ました。その內先生も起きられて私のすがたを見るなりよろこんで下さります。私は先生に對しては何とも申されません。先生は私に對し御父樣の御肖像を出せと仰せられますから、私は亡き父の肖像を床にかけました。父と面を見合するなり、又も頭が上らず申譯ないやら勿體ないやら、唯もう涙と念佛計り、この心の有樣はとても何とも申上られません。斯樣に書かせて頂くと丁度その時と同じ心もちになります。南無阿彌陀佛〳〵。

其日は仕事も手につかず、不思議な事と思ひ、唯念佛稱へては有がたい　何とも申樣はありません。其日先生は多良木の弟の方に御越しになり、多くの御同行や妹等も御供を申上げ急にあとは寂しくなりました。夕飯をすまし御佛前に參ることを非常にうれしく思ひ、八時頃より母と共に參りました。御敎本を手にしますことは二十何年振り、即十五六の折父に連れられて御つとめの稽古をいたしたこと以來、はじめてゞ御座います。母が申ますには、御文樣は五帖目樣が一番よくわかると申ますから、第一に末代無智を頂きました。始め二三回はぼんやりいたして意味がわかりませんが、四五回頂きますとだん〳〵わかり、次第〳〵に有難いこと何とも申樣がありません。末代無智を凡そ二十回計り頂きました。次ば八萬の法藏之も二十回計り頂きました。其次〳〵と頂くこと限りありません。母は私の姿を見て不思議に思ひ、私も母を見ては涙をこぼし、實に何とも申上られません。御文樣が私の手について離れて下さらぬ樣にて、どうしてもやめられませぬ。母が申ますには「友次郎、もう夜ふけて三時も疾うに過ぎたから、床についてはどうかい」と。私は唯々佛樣の廣大なることを思ひ、口からは何とも話されません。母の申すまゝに床につきました。

翌朝は早く起きて御佛前に參り、又々御文樣と離れることが出來ませぬ。母が來まして朝飯をしまへと申ますから、母の申やうに御飯をすまし、店に出ましたが、帳簿をひろげても字が見えませぬ。又御文樣を讀みたくなりましたから、店を他の者と代り、御佛前にて頂きます。一字一句何とも云へぬ有難さがいたします。同じところを何十遍繰返すやらわかりません。とう〳〵昼飯時になりました。母が又來まして昼飯をしまへと申ますから、やつと御文章をそこに置き昼食につきました。丁度この時吉田先生が多良木から御歸りになりました。非常に御なつかしい心がして、先生を見ては涙こぼるゝ計り、先生が私に「堤樣どうです」と御尋になりますから、私は「御文樣を見ると、どうしても離るゝことは出來ません、御文樣が手にひつついて離なれて下さらぬ樣な心もちがいたします」と申ました。先生は涙を流して、唯不思議〳〵と御よろこび下さる。私も何とも申樣はなく不思議〳〵とよろこびました。母もよろこびます。弟もよろこびます。姉もよろこびます。三人の妹も皆よろこびます。實に〳〵何とも申樣はありません。その翌朝先生は福岡の方に御歸りになります。別れのつらさ何とも申されませぬでした。停車場迄御見送りいたし、御すがたの見えなくなるまてながめて居りました。涙がながれますけれども、念佛を稱ふれば御目にかゝる樣な心もちがいたしてうれしくあります。

その後と云ふものは、毎朝毎夜御佛前に詣て、御文樣を開いては御開山樣や蓮如樣に御目にかゝる思がいたし、一々私一人に御話を頂く樣な味がいたし、御開山樣の御苦勞を思へば勿體ない。御開山樣をながめては佛樣の廣大なることを思ひよろこんでをります。近角先生の「求道」を頂けば、私一人に御話下さる樣に思ひ、何とも云へぬありがたい感じがいたします。本年五月私の宅へ近角先生の御入來下されたるも、全く私一人の爲と思ひまして、實に勿體なく有がたく頂きました。

案じて見ますれば、すること爲す事欲から出て居る。毎日〳〵惡を働く計りの私、この性分は私はどうしてもやめられませぬ。十惡五逆の罪人、五障三從の女人と云ふは、私自身のことであります。十惡五逆の罪人なりといへども、五障三從の女人なりと雖も、更にその罪業の深重に心をばかく可らず。唯他力の大信心一つにて、眞實の極樂往生をとゞべきものなり。聖人の仰せには彌陀の五刼思惟の願をよく〳〵案ずれば偏に親鸞一人が爲めなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、助けんと思召立ける本願のかたじけなさよと頂き奉り、そくばくの業をもちける身とは私自身の事なり、勿體ない〳〵。聖人の仰に善惡の二つ總じて以て存知せざるなり。唯念佛して彌陀に助けられまゐらすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずるより別の仔細はなきなり、と仰せられたり。勿體ない〳〵。南無阿彌陀佛〳〵。

蓮如上人の詠歌に曰く

ひとたびもほとけをたのむこゝろこそ、
　まことの法になふみちなれ。
つみふかく如來をたのむ身になれば、
　のりの力に西へこそゆけ。
法をきくみちに心のさだまれば、
　南無阿彌陀佛ととなへこそすれ。

と仰せられたり。南無阿彌陀佛〳〵。

實に何ともかとも申上られませぬ。以上唯ありのまゝを書かせて頂きました。南無阿彌陀佛。（大正二年十月廿八日）

私一人がためなりけり

椎葉勝一

私は生來不幸な身の上でありまして、私の母親は私を生み落して直ぐに死にましたので、生れ落つるなり他人の手に取り上げられ、當時六十歳になる祖父が一方ならぬ心配をしてあちらこちらと乳を貰ひ牛乳を飲ませ、乳母を雇ひ入るゝなどいたし、非常に苦心してくれたさうです。又父は養子でありましたから、其後跡入りの母を呼んで、間もなく何かの事情の爲め離縁となり、私を殘して里に歸つてしまひました。それからといふものは、愈々祖父が一手に引き受けて育てゝくれました。祖母は當時中風症にかゝり、私が三歳の時に死にましたさうです。跡入りの祖母も參りましたが、私は乳の有る家にこの時から預けられ、九歳の時迄育てられました。

小學校に通ふ時分になりて、他人から眞の親は生み落して直ぐ死んだといふことを聞かされて、小供心にも悲しい思ひがいたしましたが、それ以來は「自分は親なし子だから」といふ觀念が、深く腦裡に刻まれ、友達から少々無理を云はるゝと、直ぐに「親なし子だからと思ふて輕蔑さるゝ」とつらい思ひがいたし、又學校を卒業いたした時など、友達の親が得意顔で喜ばれるのを見ては「嗚呼自分も親が居つたならば」とそゞろ涙に咽ぶことも、幾度であつたか分りません。かゝる有樣で、いつも他人が何かにつけて私を輕蔑する樣に思はれて、仕樣がないのでありました。

高等小學を卒へまして、二ヶ年ばかり遊び、農學校に入學いたしました。所が祖父は最早八十近くになりて老衰し、祖母は中風症にかゝり半身不隨となり、家政のことも私が引き受けてやらねばならず、斯くの如き事情の爲めに、親戚からも無理に勸められて、在學中妻を迎へることになりましたが、二人の老人は氣短かになりて無理ばかり申し、其他種々雜多の心配事ばかり出來て、それが爲め一方成績も擧らず、殊に學生でありながら妻帶したといふことが、同僚に對して一大恥辱の樣に思はれ、一層のこと學校を止めてしまふと決心いたしましたが、先輩學友の忠告を受けて漸く思ひ止まりました。而し胸中はやはり一種の不安に充たされ、嗚呼實につらい、世の中といふ所は何故にかくも情ない所か、一として意の如く進行せぬ、こんな苦しい事ならば生きて居つて何の甲斐があるか、寧ろ死んでしまつた方がましだと、幾度か案じ幾度か惑ふたのであります。

併し乍ら又思ひかへて、最早二人の老人も病身になつて居るのだから、永い事ではあるまいと、僅かの望みと慰安とにて日を送り、漸くのことに明治四十年三月學校を卒へました。其月に祖母も遂に死去いたしました。

其後は精神的苦痛も大分薄らぎまして、いざこれよりと身を一農夫と化し、學び得た學術を實地に應用し、以て地方の中堅たらんと、大なる理想を抱き進みかけました。所が又々挫折せざるを得ぬ破目に陷りました。と申すのは其年の五月に「ヒラリヤ」といふ病氣にかゝり、初めの程は餘り氣にもかけずに居りましたが、段々と體が衰弱いたし、醫者も彼地此地と擇んで見ましたけれども、初期に怠りし爲めか遂に蔓

性となりました。其内に外の病氣迄も併發いたし、一時は人樣から迄も氣遣つて貰ふ程でありましたが、幸ひに命だけは延べさして頂きました。

其れからは病氣も惡いと申す程にもなく、出來る丈け靜養いたして居りましたが、元來が愛欲と名利に支配さるゝ私でありますから、無駄に遊んで居るよりも、藥代なりともといふ考へを起して、月給生活を始め種々の職務に就きましたが、一も面白く參らず、これが爲め病氣は全然蔓性となつたのであります。老ひたる祖父も非常に心配をして、何にも申すことはないが、御前は體が弱いから大事にせよと常に申してくれましたが、これも明治四十三年の暮れに、八十三歳を期として遂に往生を遂げました。

元來私の祖父と申しますのは、至つて佛法には熱心なので彼の有名な念佛禁制の時等は、かくれ〳〵に御法の讃談をなして居たといふ有樣で、其後明治の御代となり、念佛も公然と喜ぶことが出來る樣になつたので、自ら敷地を割いて說敎所を建立し、時々名士を招待いたして皆樣と共に御法話を聽聞して居つたさうです。今の御寺は其の後これを改築されたのであります。かゝる家庭に育てられし私は、幼い時より佛樣は大切な御方といふことが自然に分かり、御寺へもついて參り、又朝夕の勤行も祖父について漸次に覺えまして、後には獨りまゝにあぐる樣になり、段々と御慈悲に馴れてしまひ後には御說敎や御演舌なども樂しんで聽聞いたす樣になり、時には涙を流して有難い〳〵と、頻りに喜んだこともありました。又其他信仰に關する書籍雜誌も購つて樂しんで讀んで居りました。斯樣な具合でありますから、從つて馴れつ子になり、一方には前來申述べし如くに、幾度となく色々と人生上の出來事を目の前に見せて頂き、手强き御催促を受け乍らも、此世の事と未來のことは全く別事とのみ思ひ込み、何事も皆前世の業報だから仕方がないが、未來は結構な所へ參らして頂くから、苦しい所をこらえて遣つて行くのが俗諦位に思ひ、自分の信仰は確かである、御報謝も人並以上に思ひ、人樣の世話などいたし、兎角今日の青年は宗敎をすべて悲觀的に解して卑下する傾向がある、御寺は老人の氣休め所、御寺參りは年寄りてからの仕事位に思ひ、僧侶は葬式供養の道具に取扱つて居るのは、大なる誤りである。宗敎は決して左樣な狹義に解すべきものではないから、これは一つ是非共青年に宗敎心を養成せねばならぬと、當寺の御住職に諮りて贊同を得て佛敎青年會を組織いたし、其他色々の方法を設けて盛んに勸めて見ましたが、最初は面白く行きましたが、龍頭蛇尾に終り、何等の效果もありませんでした。而して私思へらく、あゝ自分はこれ程迄に熱心なのに、何故人は自分の意を解してくれぬか知らぬ、人はつまらぬものだな、邪慳驕慢の惡衆生には、信樂を受持すること甚だ以て難しと仰せらるゝがなるほどさうだなど、飛んでもない方角違ひをいたして自分ばかり高上りして得意がり、これらがすべて名聞でやつて居るといふことは、夢にも氣づかう筈もありません。嗚呼何たる我身知らずの横着者でありませうか。今から思ふと實に〳〵申譯も無き次第であります。南無阿彌陀佛々々々。

かゝる仕て見樣なき私も、愈々知らさて止まぬとの大悲矜

哀のあまり、善巧の御方便によりまして御導き下されたのであります。

忘れもせじ昨年六月二十二日のことである。要務を帶びて多良木町堤重藏樣を訪ひました。(堤樣とはこれまで昵近の間ではなかつたのですが、種々の關係上知り合つて居たので、信仰のことも嘗て一二度御話いたした事もありました。)其時堤樣が申さるゝには、自分は此度福岡に參つて吉田先生といふお方に逢つて御話を承はり、はじめて眞の御信心を頂かせて貰つたと、自身の入信の狀況、信前信後の心理狀態、吉田先生の信仰の徑路等を委しく御話された。中に「次漸々とありがたくなつたといふ樣なことでは駄目で、蓮如上人御文樣の中にも、一念發起とか、他力の大信心といふことは今こそ明かに知られたり、などの御言葉があるから、信前と信後は判明して居らねばならぬ」といふ樣な、耳新たらしい事を聞き一寸異樣に感じたものゝ、なるほど左樣でなければならぬと思ひつゝも、左樣に云つて貰ふて見れば、自分も思ひ當ることもあるから、何の自分とても間違ひはあるまい位に、左程に氣にもかけず其儘御別れいたしました。

其後堤樣は態々私方に御尋ね下され、一大事だからと氣づけよがしに求道を見せて、色々お話下されましたが、一向に私が迷ひの夢が醒めぬのでありますから、其儘御かへりなされ、此度は同情に充ち滿ちたる御手紙を下されました。私一人の爲めを思ひ、御心配を下されし此時の堤樣の御心情は、如何に切なりしか、察すに餘りあります。嗚呼何處々々迄も親樣を泣かせたのであります。實に〳〵今から思ひ浮べて見れば、勿體至極もないことであります。

斯くも迷執深き私をば、飽くまで御見捨て下さらぬ堤樣否親樣は、御親切にも「今回福岡より吉田先生が人吉に見ゆるから、是非行つて御話を聞いて下さい」と御勸め下された。愈々七月二十一日となり石塚兄と共に參ることにいたしました。而し此時も私は左程飛び立つ樣にうれしくも感ぜず、寧ろ好奇心に驅られ、何んな御話をされるか、一つ聞いてやらふ位の浮つ調子で參りました。何處〳〵迄も横着者であります。午後七時着の汽車にて御出てになるといふことで、皆樣と一所に停車場迄出迎へに參りました。やがて列車がつくと間もなく、先生が溫かき顏に微笑をたゝえて出て來られ、何となくなつかしく感ぜられました。

私共は鳥越樣(堤樣の姉上樣)の御宅にお世話になりて、夜人吉新町堤樣の御宅にて座談會ありましたので、夕食後參りました。皆樣がうれしさうで思ひ〳〵に御自督を述べられます。私も尋ねらるゝまゝに、是れ迄の信仰狀態を述べました。この時は先生からひとつ賞めて貰ひたい積りて申したのでありましたが、先生の返答が何だか物足らぬ樣であり、又皆樣の御喜びなさる樣が、一向に私には感ぜられず、何だか極りが惡るくなつて參りました。

其時堤重藏樣が私に申さるゝには、「如何です、先生の御話が分りますか、あなたのこれまでの信仰と變つて居る所がありはしませんか、如何です」と。私は答ふる言葉がありませんので、暫く默つて居ましたが、其時不思議にも(この時は無意識でしたが)斯樣なことを思ひ出しました。それは嘆異

鈔第一節の「念佛申さんと思ひ立つ心の起る時、攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり」との御言葉であります。私しは幼い時から念佛は唱へて居るのだから、何時が念佛申さんと思ひたつ心の起る時であつたやらさつぱりわからぬのであります。そこで私がその通りに申しましたら、そこをすかさず先生が「あなたのやうな信心ならば何所にても澤山捨たつて居る。それはみんなつなぎ合せの信心だから、必らず何時か崩れてしまふ。そんなものは根本から掘り捨てゝ、此度は新らしく御頂きなさい」と、かく申されました。この時のこの御言葉が私には實に〳〵胸中をえぐらるゝやうに答へました。而して金城鐵壁とも頼んで居つた信仰も、唯この一言の下に滅茶々々に打ち碎かれ、身は千仞の谷底に墮落される樣な思ひがいたし、悔しいやら、悲しいやら、恥かしいやら、實に〳〵此の時の私の思ひは、言葉を以て言ひ現はすことは出來ません。勿體なき事ながら先生までも恨めしく、何たる情けない方であらうかと、お話だに聞きたくないやうな氣がいたし、皆樣が淺間しいとか不思議だとか申さるゝのがいやに感じました。何とも申譯も無き事ばかりであります。

此の夜晩く迄御話がありましたが、一向に分りませず、それから床に就きて考へました。嗚呼自分は今迄何を聞いて居たんだらう、ありがたいなど申して居つたのは何がありがたかつたのか、愈々今迄のが間違ひだとすれば、今夜この儘死んだならば地獄より外に行き先きはない。これは一大事だ如何したものかと思ひ出しました。所が恐ろしくなつて恰かも地獄の焔の上にても臥て居る樣な心地がいたし、苦しくなつて參りましたから、此儘起きて行つて、せめて堤樣になりとも御話を聞かせて貰ひ度いと思ひましたが、最早今夜は晩いから明朝早くから聞かせて貰ふと遠慮して、色々と考へて見ましたが、何が何やらさつ張り分らず、其儘眠つてしまひました。其翌日から昼夜共に一生懸命になつて、先生の御話は無論、御頂きなされた方々の御入信の御模樣を聞きましたが相變らず分りません。堤樣や石塚兄からも不思議ではないか、態々吉田先生が福岡より此所迄來て下されたのは決して唯事ではない、君一人の爲め態々如來樣より差向けて下さつたのだと言つて貰ひましたが、一向に不思議とも感ぜず、又先生が御出て下さつたのは皆んなの爲めの樣にばかり思はれて、何しても私一人の爲めとは思へませんでした。

三日目であつたと思ひます。堤樣や先生方と共に散歩した時などは、最も私の(煩悶の)頂上でありまして、一向に面白くもなく、心は唯々悶ゆるばかりで、殊に町内の人々の急がしさうに往來して居るのに逢ふのが何だか憎やに感ぜられ、何とも云へぬ心地いたし、早くかへつて話して下されればよいのにと、心に愚痴をこぼしつゝ、漸くのことに努めてついて歩きました。この日も遂に分らぬ〳〵て終りました。

其翌日四日目のことであります。最早自分はとても分らぬのだから、福岡迄先生について行つて頂かうと思ひました。而し御話は矢張り聞き度いので、一心に聞いて居ましたが、丁度昼前のことであります。先生が他の御方に對して次の樣な御話をして居られます。

「あなたは親から貰つた着物を着て居り乍ら、其れをば頻りに探して御座る」と。

こゝ御一言がひどく私の胸にひゞいた。恰かも電氣でもかゝつた樣な心地がして、成る程自分がその通り現在御慈悲を蒙り乍ら、其御慈悲を探して居つたのであつたといふことがしみ〴〵と胸に感ぜられました。所が今迄分らぬ〳〵と頻りにあさつて居つたのが無くなつてしまひ、胸には何も無い樣になり、ぼんやりなつてしまひ、不思議なものだと思ひ、今一度前の樣に苦んで見樣としても、今度は苦しまれぬ樣になりました。そこで私が思ひまするに、これがひよつとすれば頂かれたのかも知れぬ。而し人樣の御入信の樣はもつと際どひから、いや〳〵決してこんなものではない。何にしても不思議なことではあるなど色々と思ひました。

其儘中食に歸りまして、これまで自分が(色々と)やつて居つた事を考へると、皆んなうそ僞りばかりである。名聞であつた。自分が頂いた積りで喜んで居つたのは、あれは自力の迷心であつたか。嗚呼堤樣の御心づくし、さては吉田先生の御下向、すべてが私一人を御導き下さるゝ御方便御手廻してあつたか。嗚呼かゝる御手厚き御慈悲を受け乍ら、少しも氣づかず分つた振りばかりして、よくも〳〵御見捨て下されざりしこと。先生が佛樣を足て踏みつけて居ると申されたが、實に私のことであつた。嗚呼實に〳〵勿體なきことであると次から次へ色々と氣づかせて頂き、思はず知らず御念佛は口をついて出て下され、心は非常に樂になり、何とやら歡喜の念に滿ち、何とも云へぬ感じがいたしました。それから先生をはじめ、皆樣が非常になつかしくなりて、思へば思ふ程不思議てたまりません。

翌日は先生が多良木の方へ御出でになるといふことで、其日午後より人吉をお別れいたしました。歸途は馬車中石塚兄と二人きりて、色々と氣づかせて頂き、我身の仕合せを喜ばして頂き、とう〳〵御法の話しばかりて歸りました。歸りて村の人達に逢ふと自分のこれまての仕打ちが定めし見にくい事てあつたらう、今迄自分の方から隔てゝ居つて、他人ばかり不足に思つて相濟まぬことてあつたと心から懺悔させて頂きました。又先生より拜借して歸つた求道を拜讀いたしますと、一々がありがたく頂けます。けれどもどうも未だ頂けて居ない樣な氣がして仕樣がないのてあります。其翌日は多良木へ參りました。早速に先生へ有りのまゝを申上げた所が、入信の狀態は一人々々に違ふから、必ずしも一樣てはないと申されましたが、矢張り不安心て堪りませぬ。而し此の日からの先生の御話が一々ありがたく頂けます。眞に不思議てあります。そして先生が益々なつかしくなつて、二日間の御話が終つて先生が歸らるゝ時などは、眞實の親樣に別れる樣な心地がいたしました。

其後は堤樣方と度々法蓮を結ばせて頂き、又御聖敎など頂いて見ると、皆んな私一人に對する御示しの如く頂かれ、實に〳〵ありがたく勿體なき感いたし、御念佛申すばかりてあります。斯樣な有樣て、私が色々と氣づかせて頂き、嬉さの餘り人樣にも御話したくなつて堪らず、知らず〳〵の中に物知り顔になりて驕慢に流れ、名聞が先きに立ち、御恩の程をも

打ち忘れ勝ちになり、蓮如上人樣の御心づくしを水泡に歸して、法流を汚すといふ有樣て、何處迄も親樣に心配をかける仕て見なき奴てあります。かくの如き我身知らずの横着者をば飽くまて御見捨てなき大悲の造る瀾なき御惠みより、其後近角先生をはじめ、有田先生方も御出て下され、私一人の爲めありがたき御敎示を垂れたまひ、また吉田先生は幾度となく邊鄙の、併も粗惡極まる私の宅にまでも態々御出て下されて御引立て下さるとは、何たる廣大無邊なる御慈悲てありませうか。唯々不思議と申す外ありません。

嗚呼御開山聖人樣が、たま〳〵行信をえばとをく宿緣をよろこべと仰せ下されしが、如何なる不思議の宿緣てありますやら、無始曠劫より迷界に沈淪して苦しみ惱める私が、諸佛の御方便により、希れにも受けがたき人身を受け億劫にもあひがたき善知識に逢ひ奉り、超世無上の本願に逢はせて頂き、何たる仕合者てありませう。今は何とも申て見樣もなく、唯々大悲の無窮に感泣いたすばかりてあります。

嗚呼かくの如く生々世々の初事に逢はせて頂き乍らも、三毒五欲にくるはされては、すまじきことも、思ふまじきことも思ひ、云ふまじきことをもいひ唯々淺間しき、日暮しばかりいたして居ります。が此の仕て見樣なき淺間しき、私の根性の底の底迄知りぬいて、而も見捨てぬとの大悲の御親心一つに滿足さして頂き唯々懺悔と感謝の御念佛諸共に、日送りさせて頂く次第てあります。嗚呼思はず長々と書かせて頂きました。拙き筆にては思ふことの十分の一もあらはすことが出來ませんが、唯ありのまゝを筆にまかせて書き記した迄て、從つて前後錯雜して不得要領の點も多々ならんと存じます。何卒々々其邊は御推察の上、御判讀を願ひます。

釋迦彌陀は慈悲の父母　種々に善巧方便し
われらが無上の信心を　發起せしめたまひけり

南無阿彌陀佛々々々。

（大正二年九月三十日）

成

成朝電車にて深川に赴きたるに、母らしき女の一人の盲目の子をいたはりつゝ相伴ひて乘車せるあり、あまりのいぢらしさに、側によりて言葉をかけたるに、かの子は生れつきの盲目なりといふ。此の哀れなる母子の樣子を見るにつけ、予は直ちに久遠劫來生れつきての盲明の暗にとざされてさまよひ來れる我等を憐みます、眞實の御親心に思ひ至り感殊に深し。彌陀成佛のこのかたは、今に十劫を經たまへり、法身の光輪きはもなく、世の盲冥をてらすなり。煩惱にまなこさへられて、攝取の光明見されども、大悲ものうきことなくて、常に我身をてらすなり。かへす〳〵も廣大無邊の佛恩といふべし。

清水誓一君に導かれて

小林九郎

謹啓時下向寒の候、先生には益々御壯健にて、爲法日夜御盡瘁の條、誠に欣喜に不堪奉慶賀候。未見の小生より、有德なる先生の膝下に撫筆を差上ぐるは、誠に恐縮に存じ候へ共、中心の嬉び壓へ難く、失禮をも憚らず茲に禿筆を呵し申し候。

先生、小生は兄弟六人有之候も、長兄は幼時都合ありて禿頭仕り、只今は禪宗の住職となり、次兄は廿五歳を以て肺患に斃れ、他の三姉は何れも嫁して、最早や拙家は兩親と小生の三人にて、小生は自然相續者と相成、中學卒業迄は何の事もなく平凡に暮し來り候處、其後師範二部に入學後、風邪の原因にて、肋膜氣管支加太兒を併發仕り候爲、次兄の覆轍に鑑み、醫師の忠告により、直に退學療養仕り候處、中に捗々しからず、病者之常として神至過敏、懊惱煩悶に日を暮し居り、不平誠にやる方なき境界に立入、一二年を經過し候も、少しも快方に赴かず、醫師は言を狂げて實を白されざるも、小生は既に肺患とのみ思ひ込み、不治＝死＝兄の死顏＝の想は連綿として心内に充滿し、兩親も亦之を非常に心配致され、次兄の哀れを想起しては、猶小生を憫み、何とかして恢復せしめ愉快に暮させんものと思はれ候も、何の其心の小生に達するものかは、却て不平の種のみ增したるこそ誠に淺ましく候。

斯くて日を過ぐる中に、父は度々小生に告げ、誠めて申候。「汝が今日そんな體になつて安樂に暮して居れるは、全く先祖の御蔭故、朝夕の勤行には必ず參詣し、御恩を有難う思へ」（父は餘り法を重要視致し居らざるも、先祖を尊敬致し居り候）と云はれ、母も亦（母は若き時よりの聞法者にて候）折を見ては、「お前ももう迚も命はないに、後生を明るうしたら如何だ、もう妾も後生さへ願つて死んで呉れゝば後悔がないに、どうぞ今度から說敎に詣つておくれ」と、泣く樣に申されも、南無阿彌陀佛を唱うるは何だか淋しい樣な、大人氣ない樣な氣がしてならず、煩悶中は却て誹法の矢を向け、口論致す位にて、宗敎は勤善懲惡の趣旨のものにて、我の强い老夫老婦にこそ必要なれ、吾々當時の靑年には活氣がなくなつて仕舞ふなどと、理屈を比べ困らせ居り候も、結局親孝行の爲と思ひ、勤行だけは勉める樣に相成り候。

先生、然し乍ら假令「おつとめ」と言ひ條、勉むれば勉むるだけ、心捧すれば心捧するだけ心苦しく嫌になり、迚も我慢出來ず「もう斷然廢そう、親が何と云ほうとかまわない」と思ひし時も候ひしも、それも致し得ず、之れ畢竟小生の意志薄弱なる爲と、小膽力の爲なりと存じ、大に精神修養をなさんと思ひ立ち、種々修養書類を瞥見し、傍ら岡田式靜座法の實行に掛り候。

此頃は病痾も大に退き、從て神經も多少悠々と相成り、前年來惱み來りし死不治の印象はいつとなく消へ去り候處、不圖人生は信仰に到つて初めて解決する事が出來ると云ふ事を感じ、（讀みたるか聞きたるか覺へず候）信仰を得て此世に處して行き度いと思ひ立ち候。丁度之は本年二三月頃と覺へ候。其頃布敎師の村寺へ來られ候故、參詣する氣になり候も、未だ一度も聞法したる事なき故、一般聽講者と交はつて同席するは氣恥しく思ひ、布敎師の座敷にのみ對座致し居り候處、師の念佛唱へらるゝ有樣が誠に謹嚴に見へ、何となく氣高く思はれ、寔れより何とはなしに稱名致し候處、元來無意味に唱ふる念佛故、一月半も經候頃、自然に打忘れ候。併し信仰慾しやの念は依然として有之、他力宗より自力宗の方良しき樣にも思はれ、愚兄に參禪の事など尋ね候も、之も實行致し得ず。彼れ此れ致し居る内、九月頃說敎者に就て色々相尋ね候處、先生主宰の求道雜誌第一卷第六號を見せて頂き、拜讀致し候處、何とやらん心内の琴線に觸れると申しては語幣かなれ共、何となく讀み度き心地致し、早速發行所に向つて送本を乞ひ候處、何が何やら薩張り解らず、告白文を讀みては「どうしたら此樣に喜べるだらう」「どうしたらこんな信仰が得られよう」「信仰が慾しい」「之位喜びたい」と云ふ羨望的の心が起りたる位にて候。併し小生の求道心は之により大に熱せられたる心地仕り、努力一番の念勃興致し、直に廣告欄にある先生著の「信仰の餘瀝」「懺悔錄」「人生と信仰」の三部を入手致し、熟讀し候も何の得る所なく、人の煩悶より入信したる告白文を讀みては、三年前の煩悶が却て戀しく、何か煩悶にても起れば自分も入信出來ようなどゝ口惜しく感じ申し候。

此間度々說敎聽聞致し、其都度後に殘りて質問致し候も、何時も譯分らず。時には「ダン〳〵聞いてみよ、不思議なもので面白うなるに」なんどの御答やら、又時には「君は餘りこり過ぎるからいけない。それでは却て信は得られない。君の今の樣子では何物を差置いても信仰が得たい、人が誹らうが怒らうがそれを考へる餘裕がないと云ふ風である。それが仕舞ひには人との交際もいやになり、一人聖敎でも讀んで一室に居ると云ふ風になり、悒鬱になりて所謂厭世主義になる、それでは此宗派の掟に違ふ。君は餘り小量だ。餘り扁屈である。願はくば今少し氣を大きく中庸を得る樣にね」などゝ申され、一時は誠に心地惡しく感じ、前言などを承る時は、碁將棋乃至茶道花道等を、研究すればする程面白く、奥深くなる樣なもので、一種の迷信ではなからうかなどゝ思はれ、こんな位ならもうよそうかと迄落膽仕り候。實は之迄碁等を熱心に研究し居り候處、之が爲全擯の決心にて之有候故、「折角圍碁をやめて掛つたに、こんな事とはなさけない」と心苦しく思ひ乍らも何だか聞き度く讀みたく、併し聞いても何時も不得要領にて、讀むも亦常に不了解にて、最早自分は駄目だらうかと云ふ歎聲も出て候。併し喜び度いし、信仰を得たい、何か握りて安心がしたいの念は中心を退かず、日々苦しき思を續け居り候も、猶母の如く十數年來の極樂目的の聞法振り、喜び振りは會心の言葉に之なく、勿論此頃は曾ての死を考ふるだけの達眼は毛頭之なく、信仰と云ふ立派なる玉が目あてにて、寧ろ現世利益を希ふ有樣にて候。

斯くて日を送る内、求道第拾卷第八號到着仕り候故、雀躍して拜讀致し候も、矢張譯分らず、一時は失望致し候も此本にて信仰を得なくてはと存じ、讀み行く中に清水誓一君の最後と云ふ一節に至り、何だか自分の事が書きある如き氣致し、先生の同君に御話し相成りし所を熟讀致し居れば、何だか私が捕へよう握ろうと思ひ居し手を斷ち切られ、上ろうと思ひ

苦しみ居りし蛭より谷底へ蹴落されし感じ起り、今迄握ろうと思つてもがき、上ろうと思つて苦しんで居たのが、大罪を犯して居たのであつた様な、如何程もがいても苦しんでも、握りも登りも出來ん此奴であつたかと、自分の無力なる事が痛切に感ぜられし其時、スーッと致し、もう何とも其心持は申上様之なく、安心の出來ぬやつが可愛相じやと思召すのかと、今迄方角を迷へて喜ぼう安心しやうと思つて居たのが勿體なく、表口から見へると思つて居たのが、裏口から入られた様な氣が致し、「喜ばれぬが苦にならん」「手離の安心」などの話が特に〳〵會心の語と喜ばしく、繰返し〳〵拜讀仕り候。特に先生の御言葉を抄記して喜び度く存じ候。

今日迄喜びたい、信仰を得たい、安心したい、助かりたいと云ふ樣にのみあせつて居られたのであろう。どうしても喜ばれぬ、信仰が得られぬ、安心が出來ぬ、助からぬであろう。其助からぬものが可愛相じや、喜ばれぬものが憐れじや、夫を見捨てぬのじや、深く察するぞ、他く迄助けおゝせねばならぬと云ふやるせなき弘誓の御力であると申した。

誠に〳〵に此御言葉は私の心中をえぐつて下さる樣な氣が致し候故、早速母にも此味を申し候處、母も大に喜び呉れ、「妾も十何年來聞法して、此附近では後生願の金甲板を掲げてをるけれ共、どうもまたしつかりせんに、よく〳〵御前は宿善の厚いのじや妾の濟度人じや、妾は前生が御恥しい」と云ふて泣かれ、もう小生も何と返事の致し樣も之なく、一時は共に〳〵嬉び候も、或時不圖したる事より蔬張り前の味ひが去り、頭腦が冷靜になりたると申すべきか、有難うも何ともなくなり、母に云ひたる事が僞りてあつた樣な、恥しい樣な、大罪を犯した樣な、今迄の喜びは皆迷信であつた樣な氣が致し、もう前の處を思ひ浮べても何ともない、南無阿彌陀佛を唱へても有難うも嬉しうもない、之は如何した事かと母へ話した手前もあり、穴へも入りたい樣な氣と相成り悲しみ居り候處、間もなく『歎異鈔』第九章

喜ぶべき事を喜ばぬにていよ〳〵往生は一定と思ひ給ふべきなり……誠によく〳〵煩惱の强盛に候にこそ……踊躍歡喜の心もありいそぎ淨土へ參り度く候はんには、煩惱のなきやらんとあやしく候ひなましと云々」

の句胸に浮ばれ有難く拜誦仕り候。御慈悲を喜ばるれば、之は嬉しいとおどり立ち、念佛か申されざればこんな事ではと悲しみ惱み、卑下すれば卑下慢を起す、懺悔すれば懺悔したてよいと思ひ、日々夜々善につけ惡につけ種々の煩惱を起し苦しみ惱みもう何とも仕樣なき此奴を、能くも〳〵憐み給ふ御慈悲かと、吾心の淺ましければ淺ましき程廣大の御慈悲一つが有難く喜ばれ候。南無阿彌陀佛。

乍末筆清水誓一君とは、假令小生の放逸は君が眞摯に及ばず、小生の怠慢は君が熱心に如かず、誠に潛越の申分にて候はんかなれ共、時に〳〵宿世よりの因緣淺からずと思はれ、誠に慕はしく存ぜられ候。誠に〳〵恐入る儀に候へ共、清水君と同一の信味を頂き喜び居る小生ある事を、清水家の御遺族に御風聞被下候はゞ、小生の本懷に存じ候。亦之同君の厚き御思召にもかない、冥觀にあふ事と喜ばれ候。誠に永々と書きつらね、御面倒には候はんも、之も如來の御はからひかと喜ばれ候。御許し被下度候。南無阿彌陀佛。々々々々々々。

講話

歎異鈔

近角常觀

第十三章

眞宗原始時代に於ける唯圓坊の位置

唯圓坊を研究するについて、最も着眼すべき點は唯善が河和田に下り、唯圓につきて眞宗を學びたといふ事である、唯善は云ふまでもなく聖人の御孫にして、覺如上人の父、覺恵師とは父を異にしたる一腹の舍弟である、即ち聖人の季女彌女即ち後に薙髮して覺信尼公が初め日野廣綱に嫁して覺恵師を生み、夫に別れてから禪念坊に嫁して生んだのか唯善である。然るに其唯善か態々河和田に下り、唯圓坊を師範として學びたといふには何か深き關係あらねばならぬ、此に大に注意すべき事は、存覺上人一期記に禪念坊の側注に、唯圓の父とかきてある、して見ると唯圓坊も禪念坊の子、唯善も禪念坊の子として見れば唯圓と唯善とは兄弟といふことになる、されど唯圓坊は彌女樣の子ではない、して見れば父を同じくして異腹の兄弟といふことになる、此の如き關係より唯善が唯圓坊につきて學びたといふことも最もなることゝなる、故に唯圓の父方の系圖は即ち唯善と同樣になる、母は異なれども彌女樣が禪念房に嫁せられたといふ事て、唯圓坊は一層親しく聖人の側に待ることを得たのであらう、勿論唯圓が聖人の弟子となつたが先きか、彌女か禪念坊に嫁せられたが先きか、何れにしても唯圓坊は如信上人が聖人の膝下に敎示を蒙りて信仰せられつゝある時、同じく其席に待りて御敎化を蒙りたるに違ない、是如信上人の滅後に此歎異鈔を書きたる所以である、而して聖人の滅後は如信上人を呼びて上人と崇め、今師と云ひ有緣の知識として事へたのである、此時は唯善と父を異にしたる同腹の兄にあたる覺恵師すらも、聖人の膝下にありて撫育の恩にもあづかり敎訓を蒙りしかど、聖人の芳言をば承りながらひとへに信順の儀までなかりしかば、如信上人をもて師承としたまひたとある、して見れば其弟たる唯善にしては猶更幼少である、夫故後に異母兄たる唯圓坊につきて敎を受けられたのは自然の勢である。

慕歸繪詞第五卷第一段に曰く、鎌倉の唯善坊と號せしは中院〳〵少將具親朝臣の孫禪念坊の眞弟なり、幼年のときは少將輔時猶子とし、成仁の後は亞相雅忠卿の子の儀たりき、仁和寺相應院の守助僧正の門弟にて大納言阿闍梨弘雅とて、しばらく山臥道をぞ、うかゝひける。

最須敬重繪詞五第十八段に曰く、大納言阿闍梨弘雅と云人あり、俗姓は小野宮少將入道具親朝臣の子息に、始は少將阿闍梨(失名)と申ける人の、世を遁て禪念坊となん號せし人の眞弟なり、仁和寺鳴瀧相應院前大僧正坊守助の弟子にて、御室へも參仕の號を懸られけり、むねとは廣澤の清流を酌

て眞言の教門をうかゞひ、兼ては修驗の一道に歩て山林の斗藪をたしなまれけるか、後には之も隱遁して河和田の唯圓大德をもて師範とし、聖人の門葉と成て唯善坊とぞ號せられける、とりわき一宗を習學のことなどはなかりしかども眞俗に亘りて、つたなからず萬事につけて才覺を立られける人なり。

かくの如く唯圓坊の系圖と位置とは明らかになりたが、何故抑々唯圓坊か河和田に住したかといふ事は、たしかに一問題である、そこて大谷遺跡錄の著者先啓了雅は、彼報佛寺の寺傳などに云ふ所の、大部卿の平太郎の弟平次郎が、妻の因緣によりて聖人の弟子となりて唯圓と云說は、全く中古の邪推に過ずして恐くば平太郎の請に任せて河和田に下りて敎化せられたのであらうと云ふ考である、兎に角歎異鈔の文章より見たるときは、一往の百姓獵師風情の俄に御弟子になりたるものゝ樣には見えぬ、又晩年文永十一年唯圓坊上洛せられたるとき、河內國安宿郡玉手山安福寺に眞圓慶西化益しつゝあるとき、唯圓坊が訪ひ來りて慶西の導きによりて、大和國下市の立興寺を立てたと傳へられて居る、すべて此般の消息に至りては猶十分に研究すべき餘地が存して居る。

唯圓坊は如信上人と同時に聖人の敎誨を承り、唯善の師匠として眞宗を傳へ、又覺如上人に對しても上洛の時、對面して日來不審の法文に於て特に善惡二業の問題を決し、今度あまたの問題におきて自他數遍の談に及んだとある、而して安心をとり侍るうへにもなを自他解了の程を決せんためにとあれば、唯圓坊か自督安心の上に於て著しかりし事は明了てある、加之如信上人滅後に此歎異鈔を著して上人口傳の眞信を今日に傳へたまひたのてある、流石に萬德圓備の法益として自然に到る處可ならざるはない、實に原始時代の眞宗即ち聖人滅後の眞宗に於て、擁護法燈の補弼闢邪顯正の干城と謂ふべき法將てあると謂はねばならぬ。

覺如上人唯善間に於ける宿善につきての評論

存覺上人一期記によるに、唯善もと山戒なるが落墮の後奥郡河和田にて嫁成仁し子息等出來すれども、無足窮困の樣なれば覺慧法師召上して大谷の南殿に住せしめられた、覺如上人は北殿は唯善は南殿に住せられた、其時宿善につきて議論せられたることが出て居る、畢竟是亦善惡二業の問題に關聯して居るのてある、此章にも關係あることなれば蓽歸繪詞最須敬重繪詞の文を引きて見れば

蓽歸繪詞に曰く、いにしへ法印と唯公とはかりなき法門相論のことありけり、法印は往生は宿善開發の機こそ、善知識に値てきけば即信心歡喜するゆへに報土得生すれと云々、善公は十方衆生とちかひたまへば更に宿善の有無を沙汰せず、佛願にあへはかならず往生を得るなり、さてこそ不思議の大願にて侍れと、こゝに法印かさねて示す樣、大無量壽經には若人無善本不得聞此經淸淨有戒者乃獲聞正法、曾更見世尊則能信此事謙敬聞奉行踊躍大歡喜、憍慢懈怠難以信此法、宿世見諸佛樂敎如是敎とかゝれたり、宿福深厚の機はすなはちよく此事を信じ、無宿善の者は憍慢懈怠にして此法を信しかたしといふことあきらけし、隨て光明寺

の和尙この文をうけて若人無善本不得聞佛名、憍慢懈怠難以信此法、宿世見諸佛則能信此事謙敬聞奉行踊躍大歡喜と釋せらる、經釋ともに歷然いかてか、これらの明文を消して、宿善の有無を沙汰すべからずとはのたまふやと、そのとき唯公さては念佛往生にてはなくて、宿善往生と云べきや如何と、又法印宿善によて往生するともまふさばこそ宿善往生とは申されめ、宿善のゆへに知識にあふゆへに、聞其名號信心歡喜乃至一念する時分に往生決得し、定聚に住し不退轉にいたるとは相傳し待れ、これをなんぞ宿善往生といふべきや、そののちは互に言說をやめけり、伊勢入道行願とて五條大納言邦綱卿遺流なり、しかれは眞俗につけ、和漢兩道にむけてもさる有識の仁といはれしか、後日に此事を傳聞て彼相論の旨是非しけり、伊勢入道の詞に云、北殿の御法文は經釋をはなれず道理のさすところ言語絕し畢りぬ、又南殿の御義勢は入道法門なりとてあさわらひけりと云云、昔は大谷の一室に舅甥兩方に居住せしにつきて南北の號ありければ行願はかくいひけるにこそ

最須敬重繪詞には猶丁寧に敍してある。

曰く、覺慧尊宿には一腹の舍弟にて坐給ければ大和尙位には叔姪の中にて居を南北にならべ、交を朝夕にむすばれけるか、常には法門の談話ありけり、或時はかりなき辭論あり、尊老人に對して法文を演說し給ことありける詞に、いま聞法能行の身となるは善知識にあへる故なり、知識にあふことは宿善開發のゆへなり、されば聞て信行せん人は宿緣を悅べしとのたまひければ唯善大德難ぜられていはく、念佛往生の義理またく宿善の有無をいふべからず、すてに所被の機をいふに十方衆生なり、その中に善惡の二機を攝す、善人にはまことに過現の善根もあるべし、惡人には二世一毫の善種さらになき者もあるべし、今の義ならば是等の類は本願にもれんと申されけり、尊老の給げるは、頓敎一乘の極談凡愚濟度の宗旨を立する時、たゝをしへて念佛を行ぜしむるにあり、その出離の機をさだめんにおいて、とをく宿善をたづぬべからざる事はしかなり、他師下三品の機を判すとして、始學大乘の人なりといへるを宗家破して、愚惡の凡夫と釋せらるゝは此意なり、されば大經の文に雖一世勤苦須臾之間後生無量壽佛國といへる一世修行に依て九品の往生をうるとは其義勿論なり、あらそう所にあらず、たゞし退てこれをいふに往生をうるとは念佛の益なり、敎法にあふことは宿善の功なり、もし宿善にあらずして直に法にあうといはゞなんぞ諸佛の神力一時に衆生をつくし、如來の大悲一念に菩提をえしめざる、しかるに佛敎にあふに遲速あり、解脫をうるに前後あるは宿善の厚薄にこたへ修行の强弱による、このゆへに經には若人無善本不得聞此經とも、宿世見諸佛樂敎如是敎ともとけり、就中和尙淸淨覺經の文を引て信不信の得失をあかしたまへり、これすなはず不信者はこの說をきゝて慚愧をいたし、自心をはげませんがため、もとより信順のものは、いよ〳〵堅持して怯弱のこゝろをのぞかんがためなり、佛說すてに炳焉なりいかてか宿善なしといはんと、唯公又さては念佛往生にはあらて宿善往生にこそと申されければ、尊老又宿善の當體をも

て往生すといふ事は始より申さねば宿善往生とかけりおほせらるゝにもおよばず、往生の因とは宿世の善もならず、今生の善もならず、教法にあふことは宿善の緣にこたへ、往生をうることは本願の力による、聖人まさしく遇獲行信遠慶宿緣と釋し給うへば、餘流をくみながら相論にをよびかたき歟と云云、其後兩方問答をやめたかひに言說なかりけり、五條大納言邦綱卿の遺孫にて、東海の州吏をへたる一人の雲客あり、北白川院に待て仙院の事をばよろづにつけて申沙汰せられけるが出家發心して、伊勢入道行願とぞ申ける、俗體の時も才幹和漢にわたり、管絃の道なども人にしられたりしが、隱遁の後は法談の處々にちかづきのぞみて聖道淨土の法文に聽聞の耳をそばだて、諸宗久學の碩德に難答の詞をも通して、博覽內外典をかね、智辨隨分の譽ありし人なり、かの人今の諍論を後に聞て、上綱の述義は佛敎の正旨にかなひ、學生の智解ときこえたり、荒凉の狂言なれども唯公の義勢は、入道法門なりとぞ申されける、入道法門とはいかなる事にか、慥に相傳の旨はなくてたゞ暗推の義なる由を申されけるにや

信仰の實驗より見たる宿善問題

前記の諍論に於ける着眼點の相違を明らかにするため、信仰の實驗より宿善の意味を明かにしたゐと思ふ、先づ何より遇獲行信(或は信心)遠慶宿緣の御言によりて明らかなるが如く、宿善を感じ、且つ喜ぶのは信心獲得の上で分かりてくるのである、決して宿善があるのか、ないのかといふ樣に考へて信仰の實驗が來るのではない、隨分世の中には私は無宿善でありますから駄目でありますとか、若くは如何にして宿善が開發するのでありますかと問ふ樣な人がある、宿善の有無といふことは信者自らが考ふべき問題ではない、唯善を善意に解釋すれば、此誤に陷ることを拂はんためであると辨じてもよい、此時は宿善といふことを此十三章の「よきこゝろの起るも宿業のもようすゆへなり」といふことと同意味にすることになる、現に一本には宿業を宿善に作りてあるのがある、併夫は大に曲解て、此歎異鈔に宿業といふのは、我等が平生の善惡の行爲は皆過去の業より來るといふ我等相對的の善惡につきて云ふのである、今宿善とか宿緣とか云ふときは、我等を絕對他力本願に導きたまふ諸佛の御緣及び我等の結緣を申されたものゆへ全く別である、猶一層適切に言へば、宿善そのものは勿論猶自力なるゆへに相對的なれども、之を緣として我等を絕對他力本願に導きたまふ諸佛の結緣は絕對である、和讃に三恒河沙の諸佛の、出世のみもとにありしとき、大菩提心おこせとも、自力かなはで流轉せりとあるが、即ち宿善である、自力の善なるが故に今日まで迷ひ來たのである、されど唯信鈔文意に左の如く仰せられてる曰く、

ゐの信心をえがたきことを大經には若聞此經信樂受持難中之難無過此難と敎へたまへり、小經には極難信法とみへたり、此文の心は、此經をきゝて信ずると難きかなかに難し、之にすぎたる難きことなしとなり、釋迦牟尼如來は、五濁惡世にいてゝ、此難信の法を行して、無上涅槃にいたりとときたまふ、さて此智慧の名號を濁惡の衆生にあたへたまへり、十方諸佛の證誠恒沙如來の護念ひとへに眞實信心のひとのためなり、釋迦は慈父、彌陀は悲母、我等が、ちゝはゝとして信心をおしへ給へりとしるべし、過去久遠に三恒河沙の諸佛の世にいて給ひしみもとにして、自力の大菩提心をおこしき、恒沙の善根を修せしめしによりて、今大願業力にまふあふことをえたり、他力の三信心をえたらん人は、ゆめ〳〵餘の善をそゝり、餘の佛聖をいやしふするとなかれとなり。

是に由て之を觀れは我等は自力の善をなせしかど、諸佛は之を緣として他力本願不思議に導きて下されたのてある、是が宿善てある宿緣てある、恰も十九二十の本願は衆生は自力に止りて、佛智不思議を疑ひながら罪福を修しつゝあるものを如來は之を見捨て給はず、佛智不思議を疑ふものを飽まて疑はず、遂に信ぜざるを得さるまて引導し果遂し給ふ佛智不思議が十九二十の本願てある、然るに十九二十の本願まてを、專ら人を自力に迷はしむる本願の樣に誤解する如く、宿善は行者の自力なればとて、之を他力に導きたまふ釋迦諸佛の御緣までを空しくするが間違てある、夫故宿善のことを普通の善惡二業の如く扱ふが間違てある、然れども信仰に入らざる前には此味は分からぬゆへに、信仰前に宿善を云云するは、恰も喜びたいとか喜べぬとか、信心を得たいとか得られぬとかの考が邪魔になると同樣なるゆへに、唯善は之を拒みた意味ととれぬてもない、此時は敎化門の立場て云ふたとになる、されど覺如上人が入信の場合をいふのてはない、念佛は善惡を問はず、往生は本願力による、其本願他力念佛に遇ふとは宿善の力てあると度々精しく仰せらるゝにも拘らず、さては宿善往生にてありけりなど理窟的なる批評をして居るのは曲解と云はぬばならぬ、一層嚴密に說破せは、信心をいたゞきたる已上は、釋迦彌陀の善巧方便過去諸佛の宿緣を喜ぶ心は必ず起るものてある、唯善は此十三章の唯圓坊の話を杓子定規にとりて、眞の信仰實驗を味はぬものと云はれても仕方がない、若し理窟一偏に陷りて信仰的實驗を味はぬときは、却て唯善の說が分かり安くして、却て覺如上人の御話が分からぬとになる、覺如上人の御敎化は御自身が實驗の結果を經釋及び祖訓の上て申されたのてある、現に歎異鈔ても先づ序言に、幸に有緣の智識によらずんば、爭てか易行の一門に入ることを得んや、全く自身の覺悟を以て他力の宗旨を亂るとなかれと仰せらるゝも、善智識に遇ひたる宿緣を喜ばれたものてある、又親鸞は弟子一人もたずさふらふ、そのゆへはわがはからひにて、ひとに念佛をまうさせさふらはゝこそ弟子にてもさふらはめ、ひとへに彌陀の御催にあつかりて念佛まうしさふらふひとを、わか弟子とまうすことはめたる荒凉のことなり、つくべき緣あればともなひ、はなるべき緣あれは、はなるゝとのあるをも、師をそむきてひとにつれて念佛すれば往生すべからざるものなりなんといふと不可說なり、如來よりたまはりたる信心をわがものがほにとりかへさんとまうすにやと、このつくべき緣、はなるべき緣とあるが矢張宿緣の有無てある、自然のことはりにあひかなはゞ佛恩をしり又師の恩をもしるべきなり、如來の願力不思議の自然をいたゞきたならば、善知識の御恩も宿善の御催もわかるのてある、宿善宿緣といふことを自分の善の方に眼を付けて見るが間違てある、自力の善を力としつゝある間は未だ宿善開發せざる間のとじや、故に若し覺

如上人の御教化を、我等が自力の善の力て他力に過へたといふとにすれば、宿善といふとに釋迦彌陀諸佛の御力を認めぬことになるゆへ大なる間違に陷る、宿善といふとは我等は自力ながら善をなしたるが、釋迦彌陀諸佛の御導きて遂に他力に過はして貰ふたといふことてある、此意味を一層明瞭にする爲に、眞宗に於ける釋迦彌陀諸佛の關係を明らかにせねばならぬ、若し釋迦諸佛の教は三學六度の萬善諸行とすれば、とても我等には叶はぬのてある、其何れの行も及びがたき我等を助くる爲に、彌陀の五刼思惟の本願を起して下されて超世希有無上殊勝の無碍の一道を開いて下された、是我等が自力の善をすてゝ絶對他力に歸する所以てある、しかれども尋常の教てなきゆへに極難信といふのてある、何んとなれば我等は自力善の道を過るからてある、慢心懈怠難以信此法といふは、矢張自力てやれると思ふて居るからてある、一代諸教の信よりも、弘願の信樂なほかたし、難中之難とときたまひ、無過斯難とのべたまふとあるが是てある、即佛智不思議を信じ難いとてある、此時は彌陀法と釋迦法諸佛法とは正反對てある、しかるに意外なるかな、恒沙塵數の如來は、萬行の少善きらひつゝ、名號不思議の信心を、ひとしくひとへにすゝめしむ、却て釋迦諸佛は六度萬行をさしおきて弘願他力をすゝめたまふのてある、醫者は病を救ふが本意てある、若し病重くして自分の藥を以て救ふべからざる時、若し特別の妙藥が發見されたるときは、世界擧て凡ての醫者が之を推賞する如く、生死出離が三世諸佛の本意なれば、若し釋迦諸佛の法にて助くべからざる五逆謗法一闡提の輩が助かる本願醐醍の妙藥が發見されたるときは、いかてか釋迦諸佛の之を勸めたまはざるべき、三世諸の如來出世の正しき本意は、唯阿彌陀の不可思議願を說かんとなりといふは是てある、釋迦諸佛の法は却て方便引入のためにすぎない、そこて我等が三恒河沙の諸佛の前にて起せし自力の大菩提心は、自力としては何の功もなかりしが、之を以て今日本願他力に過ふべく導きて下されたのじや、宿世見諸佛樂聽如是教とか若人無善本不得聞此經淸淨有戒者乃獲聞正法とか云ふのが是てある、而して彌陀の一法を勸めたまふのか阿彌陀經の六方恒沙の諸佛の勸信てある、證誠てある、護念てある、十方恒沙の諸佛の、證誠護念のみとにて、自力の大菩提心の、かなはぬほどはしりぬべしとある是てある、されど本願他力は易往而無人て、其自力根性ては中々信じ難い、夫故ます〳〵諸佛が證誠したまふのてある、眞實信心うるとは、末法濁世にまれなりと、恒沙の諸佛の證誠に、えかたきほとをあらはせり、かくの如く自力の善から本願他力に導きたまふが宿善の御催てある、其釋迦諸佛が、かくの如く我等を勸めたまふ源淵は彌陀第十七願てある、諸佛の護念證誠は、悲願成就のゆへなれば、金剛信をえんひとは、彌陀の大息報すべし、此に於て釋迦彌陀一致諸佛即彌陀といふとになる、覺如上人は我等が自力作善の功を宿善と云はれたのてはなく之を緣として此無碍の一道に導きたまふ御力を仰きて宿緣宿善と云はれたるのてある、實に此御力は我等が獲信の立所に忽ちに感ずるのてある、聖人が噫弘誓の强緣は多生にも遇ひ難く、眞實の淨信は億刼にも獲がたし、遇々行信を獲ば遠く宿緣を慶べと仰せられた所以てある、又求道の人々が僅か一

言半句の法を聞きて心身悅豫の有樣は、實に曾覓見世尊則能信此事謙敬聞奉行踊躍大歡喜の文字に見るが如く活躍する、こは如來の御催あるにあらざれば決して起るべきことてはないのてある、如來智慧海、深廣無涯底、二乘非所測、唯佛獨明了てある、宿善開發の時が即ち信樂開發の時てある、若し詳かに言へば運如上人の五重の御文の通りてある、一には宿善二には善知識三には光明四には信心五には名號是てある、宿善の御催により、眞の知識に遇ひたてまつり、其言の下に如來の招喚の勅命をきゝ、光明の催によりて初めて彌陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生をば遂ぐるなりと信じて、念佛まうさんと思ひたつ心の起る時即五重の義成就したのてある、和讃に曰く諸佛方便ときいたり、源空ひじりとしめしつゝ、無上の信心おしへてぞ、涅槃のかとをはひらきける、眞の知識にあふことは、かたきかなかになほかたし、流轉輪廻のきはなきは、疑情のさはりにしくぞなき

眞宗原始時代の諸傾向

眞宗原始時代に於ける信仰は各種の方向に流るゝ諸傾向を持つたに違ない、而して信仰正覺を得ざるときは、正反對の傾向が一點から分派して來る奇妙なる現象が起る、たとへば聖人が袈裟を掛けて魚肉をあがりたるは、自分は破戒無慚の徒にして出家として肉味を貪するといふ罪惡の塊てある、而るに袈裟は是三世諸佛解脫の憧相なれば、是ても掛けて食したらば又御緣も結ぶともやあらんと云ふ思召てある、又本尊聖教は如來の流通物なれば、世間の財物の如く取戻すとは出來ぬ、親鸞はつまらぬものなれば其名字ののりたるを嫌ひてたとひ山野にすつとも却て之に觸るゝ有情群類蠢々の徒之が爲に結緣するてあろうとの思召てある、兩者とも自己の全く無價値なるとを自覺して、全然佛の御力の無碍なるを仰ぎたまひたのてある、是如來の御緣の遍く自然に屆いて下さる絶對他力を信ぜられたる有樣てある、若此例を聞誤りて、故意に袈裟や名號を以て虫魚の類に屆けたいといふ自力根性があれは、所謂雜行雜修になつてしまうのてある、善鸞大德が雜行雜修をせられたといふも必ず一步の誤が千里の相違を來たしたものと思ふ、かくの如く何事でも放逸に流れたもの故、他には淨與寺の二十一箇條の如き律法主義が起りた、其律法主義を破つたのが如信上人唯圓房などて、即歎異鈔にあらはれたのが律法主義を粹くべく試みられてある、而して關東は他の極端に走りて個々別々に放縱に流るゝ傾向を生じた、そこて覺如上人は改邪鈔にある如く其放縱を矯正せんと試み、且つ一宗の基礎を固めんとの思召なるが故に、勢雜行をやめよとか、現世を禱るなとかいふ樣に、亦律法主義の傾向を帶びて來る樣に思へるのてある、然れども眞の信仰は雜行雜修をせぬことてはない、雜行も出來ず現世を祈ることが出來ぬ樣になるとてある、又放縱に流るゝことてはない、如何にも放縱なること罪惡なることを慚愧する樣になることてある、今宿善問題につきても宿善はいらぬといふとてはなく、是非善惡分からぬ我身也といふことを自覺するのてある、又宿善が入用じやといふのてはない、其分からぬ我身を見捨てたまはぬ御緣の深きとを慶ばずには居られぬのてある、和讃に曰く曠刼多生のあひだにも、出離の强緣しらざりき、本師源空いまさすは、こ

のたびむなしくすぎなまし、多生曠劫この世まてあはれみかふれるこの身なり、一心歸命たえずして、奉讃ひまなくこのむべし。

そら事たわ事

拜啓、嚴寒の砌、先生益々御健勝の段奉大賀候。先生の御高恩は、一日として忘るゝ暇は無之候へども、何分山河幾百里を隔てゝ、度々御安否御伺ひ申上ぐべき事も儘ならず、只求道雜誌の御送附を、一日千秋の思ひにて相待ち居り、先生の溫顏に接するの思ひをなして、滿足するのみに候、去りながら出離生死の一大事に就ては、毫も念頭を離れず　晝夜不斷他力大行の御催促に預り、稱名相續に愉快なる日を送り居り候間、何卒御安意被下度候。之れ偏に先生御化導の御恩と奉感謝候。別紙佛恩報謝の餘り、心に浮び出てたるそら事たわ事、元より呂律も合はざる、歌とも何とも分らざるものなれども、御慰み迄に御一覽被下度候。かく申す時は何とやら「名利に人師をこのむなり」との御叱りを蒙るやうの心地も致し候へども、何はともあれ先生の御高覽に供し度き煩惱起り候まゝ、書き添へ申候。若し私の領解上に誤解も有之候はゞ、御腹藏無之御敎示被下度候。先は時候御見舞ひ迄如斯に候。　匆々敬具

大正二三十二月廿二日

林　和　輔

折に觸れて

今頃はいづこの山に入りつらん他力の敎へ無き世なりせば

家の寶

法を聞く庭の数は何よりもたふとき家の寶なりけり

夏の炎暑中に詠ず

極樂に晝寢に行くと思ふなよ衆生濟度て休む暇なし

誠　四首

我が心誠の道に叶ふぞと思へど實は叶はざりけり

罪深き人のうはべの誠にて神の守りも有らじとぞ思ふ

世の中に佛の力なかりせば人に眞は見られざりけり

十劫の昔も今も變らざる誠は彌陀の誓ひなりけり

信心

己が機て思ひ作りし信心はまさかの時に破られぞする

貰ふたる信心ならば破られず異安心ぞと人は云ふとも

異安心

惡しくとも構はぬてなし惡しきをば知て見捨てぬ親の眞心

仰信の人の喜ぶ樣を見てかく無ければと思ふあやまり

喜びの起る心をたよりとし我が信心と思ふあやまり

願力を頼むと口で云ひながらよくなければと思ふあやまり

攝取不捨

後の世を救ふ彌陀ぞと思ひしに我身は今も救はれにけり

死して行く先はあなたに丸任せ何處へなりと連れて行きませ

十劫の昔ばかりと思ひしに今も變らぬ彌陀の御苦勞

活動する夏の田舍

四の風吹くや稻葉のそよぐ間に田草とる〳〵念佛の聲

本願招喚の勅命

極樂にまいる望みは後にして先づ能く聞けよ彌陀の呼び聲

十劫のその昔より絶え間なく呼びかけ玉ふ聲を聞かずや

いかばかり彌陀の心やいたむらん呼べど答へぬ人の多きに

純他力

行く先きは大身代で仕立て取り氏は無けれど乘る玉の輿

唯心鈔の文意

いかばかり彌陀の力のましますと知りてか人の惡を恐るゝ

善惡

よし惡しと思ふ心は世の中の人の迷ひの始めなりけり

御佛の心に善しと思しめす人こそなけれ末の世なれば

眞實の心は更になし

勸むれば善くなるものと思ふこそ彌陀を疑ふ始めなりけれ

善くなれぬものと我身を捨てゝみよやがて聞ゆる南無阿彌陀佛

恩德廣大謝し難し

御佛の御恩も知らず身も知らずよしあし言ふて日を送りけり

先きの世に深きえにし無かりせば佛をたのむ身とはなるまじ

いくたびか生れかはりて來し方を思へば永き月日なりけり

極重惡人

極惡の人は誰かと思ひしに能く〳〵聞けば我身なりけり

世の中の人の造りし罪はみな我がたましひの姿なりけり

他力大行の御催促

念佛の間は口を彌陀に貸し南無阿彌陀佛と唱へ得させん

稻の花

稻の穗に六つの花咲くさま見れば米の中にもこもる御六字

近角常觀著

訂正增補　信仰之餘瀝

第拾貳版　定價卅錢　郵税四錢　袖珍美本

人生と信仰

◎第一章 人生問題と信仰　◎第二章 悲觀思想と信仰　◎第三章 倫理力行と信仰　◎第四章 犯罪心理と信仰　◎第五章 社會問題と信仰　◎第六章 國家秩序と信仰　◎第七章 世界宇宙と信仰

第四版　定價卅錢　郵税四錢　袖珍美本

冠頭　執持鈔

新刊　定價一部三錢　郵税五冊迄貳錢　施本用・小冊子・

東京市本郷區森川町一番地　振替口座東京一六九六番

發賣所　求道發行所

一月一日發行
大正三年

DEUTSCHE SPRACHE
獨逸語

毎月一回一日發行
定價金貳拾壹錢（郵税共）
毎號四十頁

△讀書實用兩方面に渉り正確なる獨逸語の普及を期す。

△ドイツチトウダ研究の爲め獨逸特有の作物を飜譯し特に獨逸文壇の消息欄を設く。

△内容高尚にして説明懇切なるを以て初學の階梯たると共に研究の好伴侶なり。

△語學文學法學醫學其他の科學軍事等廣く各種の材料を網羅して趣味豊富なり。

△各科何れも一流の專門大家之れを分擔執筆す。

明星顯はる!!
獨逸語界の

顧問
東京帝國大學文科大學教授文學博士ドクトル　カール、フローレンツ

主筆
東京帝國大學文科大學助教授文學士　青木昌吉

編輯
第一高等學校教授文學士　三浦吉兵衛
同　第一高等學校講師文學士　上村清延
編輯主任　第一高等學校教授東京帝國大學文科大學講師文學士　大津康
執筆者　東京帝國大學教授文科大學　西田幾多郎
同　東京帝國大學醫科大學助教授醫學博士　永井潛
同　東京帝國大學法科大學助教授法學士　三潴信三
同　東京帝國大學法科大學助教授法學士　末弘嚴太郎
隨時執筆者　京都帝國大學文科大學教授文學博士　藤代禎輔
同　東京帝國大學工科大學教授工學博士　桂辨三
同　東京高等師範學校教授文學士　高木敏雄
同　陸軍教授文學士　藤井信吉
同　第一高等學校教授文學士　速水滉
同　學習院教授文學士　高橋周而
同　第二高等學校教授　エミル、ユンケル

獨逸語發行所
東京座口替振番號四六六六二
東京市本郷區曙町一番地
東京下谷區三ノ四九九番電話
發行所

求道第拾卷第九號目次

求道
◎本願一實の大道　講話
◎『教行信證』信卷三信釋　近角常觀
第十一席　欲生釋（二河の譬喩）　告白
◎踴躍歡喜　堤友次郎
◎私一人がためなりけり　椎葉勝一
◎清水誓一君に導かれて　小林九郎
講義
◎歎異鈔　第十三章　眞宗原始時代に於ける唯圓坊の位置
覺如上人唯善間に於ける宿善につきての評論
信仰の實驗より見たる宿善問題
眞宗原始時代の諸傾向　林和輔
◎そらごとたはごと

講話

毎日曜午前九時　求道學舍（木郷區森川町一番地）
毎土曜午後二時　第二求道會（九段坂佛教倶樂部）
毎月二日午後七時　第三求道會（日本橋彌榮町說教所）

求道第拾卷第九號　大正貳年十二月卅日發行（毎月一回三十日發行）　明治四十五年二月十五日第三種郵便物認可

前號要目

求道

◎光明名號の因緣　講話　近角常觀

◎繫縛と解脫　近角常觀

一繫縛と解脫――二「歎異鈔」の十三章――三我々の「斯う仕度い、あー仕度い」の心――四人を千人殺してんや――五「惡しくていかぬ」て解決の時あるか――六出來ぬことが出來るやうになるのでは無い、――七出來ざる所を哀れみ給ふお慈悲――八分って頂くお慈悲ではない――九若干の業をもらける身にてありけるを――一〇我が身の罪業に氣づいたが信心でない――一一よくも〳〵此の奴を――一二お慈悲に引つくりかへる――一三「こんな事では」の思ひ――一四一念の味ひ――「歎異鈔」第一章――一五解脫の意義――一六「歎異鈔」第二章――一七善人も其善を廻して往生す――一八自力の心をひるかへして――一九惡人もとも往生の正因なり――二〇不思議の佛智――二一善もほしからず惡もおそれなし

告白

◎病間隨筆拔抄　故出村鉎逸遺稿

雜錄

◎清水誓一君の最後　近角常觀

東京市麻布區霞土代町二ノ三光堂印刷